

# 『空の記憶』ゆめ

著作 a s h

※この作品はXの『AIR』を元にした二次創作ですが、本編におけるエピソード部分（晴子が海辺で泣くシーン後の展開）を無視して、作者の勝手な構想による創作となっています。従って、原作のラストを改変したような作品を望まない方は、この作品を読まないことを強くお勧めいたします。

『空の記憶（ゆめ）』

『空の記憶（ゆめ）』

序、記憶を継ぐもの

翼を持ったものがある。

それは、この星の大気に生まれた。

記憶を受け継ぐことで、果てしない時を旅するものたち。

だが、その記憶も永遠ではない。

この星にあるすべてのものが定命であるように、彼らもまた定命の運命を持って生まれた。

彼らはいつしか星の大気に帰る。

すべての知識と、すべての記憶——すべての喜びとすべての悲しみ——を持って。

光。

何もかもが真っ白な光の中。

誰かが立っている。

「往人さん…かな？」

何故かそんな言葉が出た。だが、自分で言っておきながら、観鈴はその名前の主の顔を浮かべることが出来なかった。

「ううん……往人さんじゃないよね、こんなところにいるはずないから」

こんなところと言ったものの、それすらもよく分かっていないまま、観鈴は少しだけ

『空の記憶（ゆめ）』

困ったように笑いながら、ふと浮かんだ言葉を口に出した。

「やっぱり、わたしってアホちゃん…」

それが誰に言われた言葉なのかもよく分からなかった。ただ、その言葉とともに、観鈴の中に安らぎのようなものが溢れていった。

いま、自分がどうなっているのか。どこにいるのか。そんなことも何も不安に感じることはない。

何故なら、自分はずっと一緒にいた、と言う想いだけがあったから。

誰と…と言うのは、分からない。

どんな人…と言うのも、よく分からない。

それでも、その人が一緒なら何でも出来ると思うし、実際に何でもやってこれたと言う想いだけはあった。

だが、何故か、悲しかった。

「にはは…」

笑ってみる。

が、それは大した意味のない行動であった。

「わたし…精一杯頑張ったんだよ。だから、もういいんだよね？」

誰に尋ねるでもなく、発せられた疑問。

先ほどから自分のそばにいるはずの誰かは何も答えてはくれず、観鈴の問いは光の中に溶けていくだけだった。

「あれ？ 何を頑張ってたんだろう？ わたしってば…」

『空の記憶（ゆめ）』

確かに何かを一生懸命に頑張っていた。それは観鈴にもはつきりと分かっていた。だが、それがどのようなことか、さっぱり分からなかった。ただ、それは自分一人では出来ず、誰かがずっと自分と一緒に頑張ってくれた…それだけは自信を持って言えた。

その時の観鈴にあったのは、安らぎと達成と悲しみ。

本当に一生懸命頑張って頑張って、やり抜いたはずなのに。

やり抜いたことで、本当に安らいでいるはずなのに。

何故、悲しいのだろう。

「あ、そうか…、わたし…悪い子だよね」

一生懸命頑張ったはずなのに、やり抜いたはずなのに、悲しい。

それは、誰かにうそをついてしまったから。

それも、一番大切な人に。

大切な人のいる、

幸せな場所で、

大切な人を、

悲しませてしまった。

「には…は…」

もう一度笑ってみる。

が、笑顔のつもりが、泣き顔になっていた。

大切な人が最後に見せたのと同じように。

「おか…あ…：…さんっ」

『空の記憶（ゆめ）』

観鈴が思わず声を上げた時。

先ほどから立っていた誰かが、ゆっくりと近づいてきた。

顔は見えない。姿も本当にそこにいるのかどうか、定かではない。なのに、自分のところに近づいてきているのは、確かだった。

「お母さんっ!」

観鈴は強く叫んだ。

それがたとえ違っていようが、そんなことはどうでもいい。

いま、はつきりと言わないとならない。

自分にとって、一番大切な人。

自分にとって、一番幸せな場所。

それが夢ではなかったことを、証明するために。

それが本当であったことを、確認するために。

何よりも強くはつきりと、言わなければならぬ。

そんな想いだけが観鈴を支配していた。

やがて。

誰かの姿が、真っ白い光の中に、はつきりと浮かぶ。

それは、もう一人の観鈴（じゆん）。

まばゆい光を放つ翼を持った少女だった。

「帰りたい?」

翼を持った観鈴が、翼を持たない観鈴に訊ねた。

『空の記憶（ゆめ）』

何故そこに翼の少女がいるのか、観鈴には分からない。だが、それについて深く悩むことなどもない。ただ素直に翼の少女に答えるだけ。

「わたし、帰りたい…お母さんのいる場所に…幸せな場所に帰りたいっ」

観鈴がそう叫んだ瞬間。

翼が強く光り出し、それまで以上に観鈴やその周りのすべてを溶かしていった。

何もかもを包む白い光の中。

翼の少女の声だけが、観鈴の耳にそっと触れる。

「観鈴が観鈴のまま帰るのには、観鈴の代わりの命が必要。観鈴を必要として、観鈴を何よりも大事に思う人の命が」

その声が告げた内容に対して、思わず観鈴は声を上げたが、それが声としてちゃんと出たのかはよく分からない。

それじゃいけないとは思ったものの、観鈴がそれ以上何かをする前に、観鈴も観鈴を取り巻くすべても、白い光の中に消えていった。

一、悲しみの輪廻

夏。

高い青空と大きな雲。

強い日差しと蝉時雨の降り注ぐ中、まだ遊び足りない子どもたちが元気に走り抜ける。そんな夏らしい喧噪がまだあちこちで繰り広げられている。

だが、神尾家の中だけは違った。

すでに忌中の表示や提灯などは片づけられ、弔問客も来なくなって、外見上は普段のまに戻っている。しかし、まるで誰もいなくなった廃墟のような雰囲気を漂わせていた。

それまで二人暮らしだったのだから、二から一を引けば一。それは実に簡単な引き算の問題であり、少なくともゼロになることはない。しかし、人の想いは単純な引き算では片づくものではない。

引き算の残りの方、つまり、いま現在この家にいるはずの存在にとっては、これは限りなくゼロに近い一だった。

すでに観鈴の葬儀も終わり、最後まで残っていた橘敬介も仕事の都合と言って帰った後、晴子は一人でぼんやりとしていた。いや、正確にはそれでも最低限の生活はそれなりにこなしながら。

その日もこれまでと同じように、居間のテーブルに突っ伏していた。

「何で……」

『空の記憶（ゆめ）』

テーブルに顔をつけたまま、時折漏れるつぶやき。これも何度も何度も同じことを繰り返している。

テーブルの上には、酒の入ったコップ。

テーブルの下には、すでにからなっている一升瓶が数本。

「何で、一人なんや……」

何をするでもなく、ここ数日もの間、晴子は居間でこうして昼間から酒を飲んでいるばかりだった。

「うちと一緒に頑張る言うたやんか……」

誰に言うわけでもなく、誰が聞くわけでもない、本当にただの独り言。

「せやのに：何で：うち一人なんや……」

一人。

最近までは二人、いや三人だった。

変な黒いヤツもいたので、それにもう一つ数を加えてもいいかも知れない。

だが、いまここにいるのは晴子一人だけだった。

羽を持ったヤツは空へ、ふらっとやって来たヤツはそのままふらっと去ってしまえば、確かに数は減るだろう。

それでも、一人ではない——はずだ。

しかし、いまは一人だった。

外出してゐるわけではない。だから、玄関から入ってくることはない。

自分の部屋で寝ているわけでもない。だから、居間に姿を見せることもない。



『空の記憶（ゆめ）』

「何でや…」

晴子の声が詰まる。

何故なら、答えは誰かに言われるまでもなく、十分過ぎるくらい分かっていたから。

観鈴はこの家にはいない——それが現実である。

自分の中に浮かぶ冷たい事実を前にして、晴子は体を起こしてテーブルの上にあったコップの中身を一気に喉に流し込む。

「くっ…」

カタンと小気味いい音を立てて、からになったコップがテーブルの上に戻される。

どこか妙な感覚だった。

確かに居間で酒を飲んでいる自分が存在してるはずなのに、酒を飲んでいるはずなのに、酒が晴子を酔わすことがなく、自分の存在さえもまるで夢みたいに感じてしまうくらいだ。

いや、もしかしたらすでに晴子は酔っていたのかも知れない。自分の感覚すら麻痺させていたのかも知れない。

しかし、それでも酒は止められなかった。

観鈴はこの家にはいない。いや、この世に神尾観鈴と言う娘はすでに存在しない。それを感じるたびに、やり切れなさだけが晴子を支配し、その手を一升瓶へと伸ばさせるのだ。

「何で…酔えへんの？ 何で…楽しい気分になれへんの？」

からになったコップを前に、底にわずかに残っている滴を見つめながら、晴子は自問した。しかし、すぐにそれは苦笑とともに返される。

「…って、当たり前や…。こないな酒、いくら飲んでも酔えるわけあれへんわ…」

かすかに自嘲の笑みを浮かべ、コップを軽くつつく。

酔っていると言う感覚すらもう分からない状態なのに、それでも気分が晴れることは一度もない。そもそも、観鈴がいた頃ですら、晴子にとって酒はあまり楽しい飲み物ではなかった。

人がいれば、つき合い酒でそれなりに明るく飲む晴子だが、晴子にとって酒は逃げ道だったのだ。

一人で飲む酒が、おいしくて楽しくてたまらない：などと思ったことは、一度もない。晴子が夜毎に酒を飲んで帰ってきたのは、素面では家に帰れなかったと言う理由もあった。だから、いま飲んでいる酒がどれほどの銘柄であろうとも、どれほどの名酒であろうとも、酔えるはずがない。

酔えるはずがないのだから、いくら飲んでも観鈴のことが頭から離れることはない。

観鈴が結局何と戦っていたのかは、晴子自身にはよく分からなかった。それでも一緒に頑張っただけで、最後にはそれを克服した観鈴を見ることが出来た——はずだった。

しかし、現実にあるのは、いま自分一人だけが取り残されたと言うこと。

「あんたはほんまに頑張ったやないか……。せやのに、何で最後に：うちにうそついたんや……」

あの日。

観鈴はもう終わったと言っていた。

だから、もう平気だと思っていた。

これからは観鈴とずっと一緒にいられると思っていた。

『空の記憶（ゆめ）』

幸せだった。

だが、観鈴はゴールしてしまった。

晴子の想いだけを残して。

「痛かったんやないか…、辛かったんやないか…。せやのに……」

最後に自分にうそをついた観鈴。だが、それを責めることは晴子には出来なかった。

一緒にいて、そんなうそが見抜けなかった。

一緒にいて、観鈴が本当に苦しかったのに気付かなかった。

一緒に頑張っていたのに、観鈴にそんなうそをつかせてしまった。

すべては自分の不甲斐なさの結果ゆえと思っていたから。

「うちなんか…どないなっても構へんのに、何で最後まで甘えてくれへんかったんや…」

葬儀の時に、誰かが言った。「最後に笑ってたなら、それでよかった」と。

また別の誰かが言った。「これも天寿だから」と。

それらの言葉が、晴子を慰めようとしているものであることは分かるのだが、それで晴子が納得出来るはずがない。

最後に笑っていたのは、詰まるところ自分に対する観鈴の精一杯の優しさの結果ではないか。本当は辛かったのに、これ以上自分に負担を掛けたくないと必死に最後まで頑張っていたのは、観鈴なのだ。

あれが天寿と言うなら、結局いくら頑張ったところで、観鈴の死はすでに決められていたことだったのか。確かにそうかも知れないが、それじゃ何のために頑張ったのか。

そんな想いはずっと晴子を取り巻いていて、いかなる時でもどれほど酒を飲んでも、一

向に離れることはなく、むしろそうして酒を飲んで逃げようとする自分をさらに激しく責め立てるばかりだった。

（うちなんかがあの子の母親になろう言うんが無理やったんやな…）

もはや言葉に出すことはないまま、晴子はそつと目を閉じた。

（あんた…うちと一緒によかったんか？）

そつと心の中で訊いてみる。

しかし、その答えが返ってくるはずもなく、誰かの声が本当に届くわけでもなく、ただ夏の喧噪だけが晴子の遠くの世界から届いているだけだった。

数日が過ぎた。

やはり、何かを積極的にする気力など皆無の晴子だったが、それでもとりあえず最低限の生活だけは維持している。

どれだけ落ち込んでいても、人間と言う一つの生き物として最低限の欲求だけは変わることがない。その事実は晴子にとって鬱陶しいものであったが、同時に、こんな時ですら食べることを考えている自分の駄目さ加減に呆れつつ、どこか安心もしていた。こんな駄目な自分だからこそ…と。

こんな駄目な自分だから、観鈴の苦しみをぬぐい去れなかった。

こんな駄目な自分だから、観鈴の本当の気持ちをつかっていたいなかった。

こんな駄目な自分だから、一人きりになってしまった。こうして悲しい思いをするのも、すべては自分が駄目な人間だったから。そう思えるの

なら、わずかとは言え救いにはなる。しかし、そうしたわずかな救いですら、いとも簡単に打ち壊されることがある。いや、些細なことで容易に打ち壊れる程度の救いでしかないのだ。

それは何気なく朝食の支度をしていた時だった。

ほとんど意識せずに、慣れた手つきで準備をしていたのだが、晴子がそのことに気がついたのは茶碗を食卓に並び終えた時だった。

「何や、これ…」

思わず自分に突っ込みを入れたい気分だった。これが普段の晴子だったら、観鈴を失う前の晴子だったら、笑いながら自分を叩いていただろう。

目の前に並んだ茶碗。それは朝食の準備としてはごく当たり前の作業で、それ自体におかしいことはない。ただ、それが二人分だったのだ。

「はっ…ははっ……ほんまに何しとんねん…」

自身への突っ込みとともに、晴子は不意にこみ上げてきた涙を抑えることが出来なかった。

「あほやな…うちも…」

二人分の朝食の用意。それはごくごく短い期間しかやっていなかった。しかし、そのとても短い期間が、晴子と観鈴と言う親子にとっては、この上もないほど大切で幸せな期間であったのは間違いない。

だからこそ、無意識のうちに晴子は観鈴の分も用意してしまった。結果として、それは一層自分を苛ませるだけでしかなかったとしても。

『空の記憶（ゆめ）』

「こんなもん用意せんでもええのに……ほんまにあほや」

またも自嘲の言葉を吐き出した後、晴子は二人分の朝食を前に顔を伏せてしまった。

自分が食べたとしても、もう一人の分は絶対に減ることがない。

いくら自分が料理の腕をふるっても、それを「おいしいね」と言ってくれる笑顔はない。そんな嬉しくない事実を、改めて認識してしまったのだ。

その後、すっかり冷めてしまった朝食をぼんやりと見つめるだけの時間が過ぎ、結局ほとんど食べなかった。

このように酒を飲んでいない時の方が、晴子は涙を流すことが多かった。確かにいくら飲んでも「酔う」までは行かなくても、涙を流さない分だけ、酒を飲んでいる方がましに思えるのだ。

むろん、それが逃げでしかないことなど、晴子自身がよく分かっていたが、それしか自分には出来ない……とあきらめのようなものが晴子を覆っていた。

かくして、同じような光景が居間に展開される。

酒をコップについては、テーブルに突っ伏すようにしながらそれを飲み続けるだけ。酒が入っても、やはり陽気にはなれず、ただ観鈴のことばかりを思う晴子だった。

晴子がまだ十代の頃に預かった姪。それが観鈴である。

まだ十代の自分が、姪とは言え人の子どもを預かる羽目になったことは、晴子にとって人生の大きな出来事の一つだった。

まだ働きだしたばかりの頃で、給料もそれほど多くないのに、子ども一人を養うと言うのは口で言うほどたやすいものではない。

『空の記憶（ゆめ）』

それに、最初からものごとがうまく運ぶ道理はない。

「最初の頃は夜中によお泣いて困ったもんやな…」

泣きじゃくる小さな観鈴を前にして、晴子はどうなだめたらいいのか分からず、逆に「やかましいわっ！」と観鈴を怒鳴ってしまふことが多かった。もちろん、そうなったら観鈴は一層泣き叫ぶだけで、ますます事態が悪化するだけでしかなかったが。

「あの頃はうちもどうしたらええんか…さっぱり分からなかったんや」

それでも観鈴との間に微妙な距離を置いたまま、ゆっくりと晴子は観鈴と時を重ねて行った。

観鈴の病気のことは預かる前から知っていたことで、自分が必要以上に親しくなつてはいけないと決めていた。そもそも、いずれは本当の親の元に返すことになるのは分かっているのだから。

だから、晴子は観鈴に対して、冷たい行動もとっていた。傍から見れば無責任な放任主義とも取られるくらいに、観鈴に対しては最低限の接し方しかしてないはずだった。

「せやのに、あの子はうちのようなついでたな」

決して十分に接していなかったはずなのに、距離を置いていたつもりなのに何故か観鈴は晴子のそばから離れようとはしなかった。

「結局あの子はうちに何を求めてた言うねん…」

十年もそうして距離を置いて来たはずなのに。

いずれは別れが来るから、深入りしないようにしてたはずなのに。

それでも、観鈴が晴子から離れなかったのは、つまりは観鈴にとって晴子は母親であつ

『空の記憶（ゆめ）』

たと言うこと。そして、晴子にとっても、観鈴は娘以外の何者でもなかったと言うことである。そもそも、いずれ別れる時が来るのは、実の親子でも同じことなのだ。

「やっばり、うちはあかんなあ……」

そんな言葉を一つ一つ重ねていくごとに、どんどん自分が「駄目」になっていく。そんな気持ちは確かにあったし、事実その通りかも知れない。それでも晴子はそんなふうしようもない悪循環を断ち切れずにいる。

醒めては泣き、

泣いては飲み、

飲んで眠り、

そしてまた、醒めては泣き……を延々と繰り返しているだけ。

悲しみに囚われている——それが誰にも共通していたことがらだった。

晴子も、

敬介も、

観鈴も。

そして、空にいる神奈も、神奈とともにいた者も。

誰もがその悲しみの輪を断ち切ることを望んでいた。

しかし、誰もがそれをなせないまま、それが出来ないことをまた悲しむばかりだった。

そんな風に悲しみから抜け出せずに、ただいたずらに時だけが過ぎていく中、晴子の生活にもさしたる変化はないように思えた。それでも、生き物には自己防衛本能と言うものがある。



『空の記憶（ゆめ）』

望むと望まざるとに関わらず、時がたてば忘却と言う川の流れがわずかずつでも悲しみを削り取っていく。それをも否定してしまつたら、人は人として生きていけなくなるかも知れない。

そして、それは確かに晴子の中にもほんの少しだけ変化をもたらしていた。ただ、それが決して晴子自身にとつて、いいことであつたとは言えないだろう。何故なら晴子にとつて、観鈴のことを忘れるなど、何があつても出来ないことだつたから。

観鈴を失つて悲しんでいるばかりの頃とはわずかに違う。

悲しいと感じていること自体は変わりないが、観鈴のことを忘れたいどこかで願う自分と、そんなことは何があつても出来ないと思つばねる自分とが、激しく対立し始めていた。

観鈴の四十九日がやってきた。

葬儀の際に見かけた顔が同じように、黒い服に身を包んで訪れる。その中にはもちろん橘敬介もいた。しかし、二人はほとんど言葉を交わさなかつた。

何も言うことはない、と言えばそうなのかも知れないが、お互い口を開けば観鈴のことしか出てきそうにない……そんな予感が二人を包んでいたのだ。

そして、二人が言葉を交わしたのは、一通りやることを終えて、客も帰つた後のことだつた。

「久しぶりだね」

「…せやな」

敬介の言葉に対して、晴子はさりと流すように返したただだったが、その表情から敬介は晴子がいまだに立ち直れていないことを悟った。ただ、葬儀の時とは微妙に違いがあることにも気付いていた。

「まだ：駄目みたいだね」

「悪いか？」

ある意味予想通りの反応を示す晴子を見て、わずかに苦笑しながら敬介が言い返す。

「いや：何だかあなたらしくないと思ってね」

「らしいもらしくないも：うちはこんなんやで、昔からな」

本来の晴子ならそんな風に答えはしないだろう：それが分かっているだけに、敬介もこれ以上余計な言葉を続けるのをやめた。

「すまない」

「何であなたが謝らなあかんの？」

「僕がもっと強ければ、あなたをこんなにはさせないのに」

やや呆れたような調子で軽く首を振りながら、晴子は敬介の言葉を否定する。「そんな関係ないわ」

「晴子」

「うちは元からこんなんやって言うてるやないか。せやから、あの子は：」

そこまで言うと、かすかに晴子の表情が曇り、言葉が続かない。しかし、その先に続くであろう言葉は敬介には聞こえていた。

「：すまない。でも、あなたならきつと大丈夫だろうね」

本当の父親と、育ての母親とは、子どもに対する愛情が深いのはどちらだろうか……などと言うのは愚問だ。

敬介は観鈴を疎ましく思つて晴子に預けたのではないし、晴子も観鈴と距離を置いたのは観鈴が嫌いだったからではない。

どちらも観鈴のことを想っていた。

だから、本来ならば晴子は敬介の気持ちも分かっているはずで、敬介も晴子の気持ちも分かっているはずだ。

しかし、いまの晴子にはそれだけの余裕はなかった。

「あー、もうほんまに鬱陶しいやっちゃん、あんたは！」

そして、敬介にもいまの晴子の気持ちをすべて理解することは出来ず、晴子の言葉をカラ元氣ゆえの返事であると思ひこみ、それ以上言葉を返すのをやめた。

「それじゃ僕は帰るよ」

それ以上の言葉もなく、敬介が帰り支度を始めると、晴子もそれを止めようとはしない。「好きにしたらええ」

互いの表情を見ようとしなのまま、晴子は短く返した。もつとも、仮に敬介が晴子を慰めようとしても、晴子が素直に受け取るはずがない。どっちにしても、この場合では敬介の役不足である。

こうして、また神尾家に晴子だけが残る。

「まったく：敬介のあほのせいで、どうにも取まらんわ……。酒でも買つてこ」

また一人になった……と言う事実をことさら実感するのを避けるように、晴子は苦笑しな

がら、独り言を漏らした。いや、一人になることが十分に分かっているからこそ、酒を買いに行こうと思い立ったのだ。

四十九日の法事がすめば、死者は仏様になると言う。それは一つの大きな区切りであり、晴子もこれで気持ちを切り替えたいと言う思いはあった。

それが出来ていれば、敬介への言葉ももっと違ったものが出てきたはずで、こんな風に酒を買いに行こうなどと思わなかったはずだった。

しかし、気持ちを切り替えるのは、晴子にとってそんなに簡単なことではなかったのだ。（どうせうちは駄目なんや…。四十九日になっても、あの子のことをちゃんと送ってやれへんし、敬介にも当たってもうたしな…）

何をしても自己嫌悪の言葉しか出てこない、そんな状態の中で前向きに変わることなど…少なくとも晴子一人では不可能だった。そして、晴子は観鈴を失って以来ずっと一人だった。

「行つて来るわ」

自分以外誰もいないのに、それでも奥の方に向かって小さな声で言いながら玄関を出る晴子。心なしかうつむき加減で、その歩みもかつての晴子のペースではない。

家を出てすぐに、ふと晴子が歩みを止める。

自分の視線の先——少し先の路上に、何かがいたのだ。

「何か黒いんおるな…」

よく見ると、それはカラスだった。

「…あなた、そらか？…って、カラスに訊いてもしやーないな…」

『空の記憶（ゆめ）』

何気なく思う浮かんだ名前を口にしてみたが、目の前のカラスがそらである根拠などは何もない。そもそもカラスに訊くこと自体が無意味だ。

「…何カッコつけてんのか知らんけど、一人なんか寂しいだけやで。とっとと仲間んとこ帰り」

晴子がそう言い終えた途端、カラスはその場で走り出した——正確には翼を羽ばたかせた。

あつと言う間に晴子の横を通り過ぎ、カラスの体は路面を離れて行く。

「それでええんや。帰るところがあるんやったら、そこに帰ればええ…」

晴子の言葉を下に聞きながら、カラス——そらが舞い上がる。

そらが舞う——それがきっかけになっていたことなど、晴子には知る由もないが、そらはひたすら舞い上がる。

届けるために。

空にいる者に、果たされた想いを届けるために。

それまで繰り返されてきた悲しみの輪廻を、断ち切るために。

そして、空にあった悲しみは放たれた。

しかし、記憶の翼はまだ空にあった。

永い時を経た、一つの、そして多くの人の想いが望んでいた——悲しい記憶ではなく幸せな記憶を——その願いを叶えるために。

『空の記憶（ゆめ）』

カラスが空の彼方に消えた。

それは晴子にとって、さほど気になることでもなく、当初の目的を達成するために再びゆっくりと歩き出す。

そして、歩き出してほどなく、ふと周りの景色に目が行った。

これまでも何度か外出したことはある。しかし、こんな風に周りの様子を眺めながら行くと言うことはほとんどなかったような気がするのだ。そんな景色を楽しむ余裕もなかったと言ふことだが、この時ばかりは何故か自分を包み込むものに対して、興味がわいていた。

いつの間にか消えてしまった蟬の声。

涼しさを含んだ海風。

「知らんうちに夏も終わってたんや…」

長いこと家にもつて酒を飲むばかりだったような気がするのと同時に、観鈴と一緒に過ごした夏の日がずいぶん昔のことのようにも思えてしまう。

「もう四十九日なんやから…当たり前前か」

そっとつぶやきながら、ゆっくり歩く。

何だか不思議な気分だった。

観鈴を失って以来、これほどゆっくりと周りを眺めることがあったろうか。

これほど落ち着いていることがあったらうか。

理由は分からない。しかし、晴子自身もそれを受け入れているのだけは分かっている。理由が何であれ、晴子は明らかにこれまでとは違っていた。そして、それこそが一つの始まりの形であった。

周りの景色や遠くから届くさまざまな季節の足音に触れながら、晴子はゆっくりと商店街へと向かっていた。

そして、商店街への角を曲がろうとした時だった。

「っと、おわっ！」

突然目の前に人が現れて、晴子はそれを避けることも出来ずに、思い切りぶつかってしまった。

「つう……」

晴子の鼻先にちょうど当たったらしく、涙が出るほど鼻が痛い。ゆっくり歩いていたのがせめてもの救いだらう。

痛い鼻を軽く押さえながら、晴子がぶつかった相手を確認すると、それは長身の若い男だった。雰囲気や外見がどこか居候——国崎往人を連想させる。ただ決定的に違ったのは、往人ほど目つきは悪くなさそうなこと。

晴子が男の様子を観察していると、男の方も晴子に向かって言葉を発した。

「これは失礼した」

「はあ？ 何や、あんた……」

思わず晴子は痛い鼻のことも忘れ、思い切り訝しげな表情で返していた。それは、男の外見と言葉遣いにかなりギャップを感じてしまったからだ。

『空の記憶（ゆめ）』

男は長身で見た目はそう悪くはない。年齢も晴子とそう変わらないか、幾つか年下くらいだろう。だが、その言葉遣いは丁寧と言うよりは、どこか古風で横柄な感じの物言いだった。

「この地は不案内ゆえに、景色を確認しながら歩いておった」

珍しいものを見る目つきで晴子が観察しても、男はそれに気付かずに妙な言葉遣いで答えるばかり。

「…あなた、どこかおかしいんか？」

「あなたの言われることは、我にはにわかには理解出来ないが」

男の返事にも表情にも、人を小馬鹿にしてるような雰囲気はまったくくない。だが、それだけに晴子は思わず頭を抱えなくなるのだった。

「あかん…うちが悪かったわ…。ほな」

この手のヤツには関わらない方がいい。それが晴子の選んだ選択肢だった。とにかく手短かに謝ると、そそくさと男から離れて行く。

「待たれよ」

「何も聞こえんで」

早歩きで去ろうとする晴子に向かつて、男が声を掛けたがそんなことにまともにつき合っではいられない。後ろを振り向かずに、晴子は来た道を戻る。

「待たれよと申している」

「そないなこと聞けるかいっ」

繰り返された男の言葉に対し、晴子は吐き捨てるように答えるとさらに足を早めた。



『空の記憶（ゆめ）』

このところすっかり運動不足な晴子だったが、商店街から家までの距離自体は大したことではない。結果として小走りくらいの速さで家に帰り、そのまま台所でコップ一杯の水を一気に流し込むくらいの体力はあったようだった。

「この町にも変なヤツがおったんやな……。気いつけなあかな……。って、うちとしたことが、酒買うて来るのを忘れてもうた」

人心地着いたところで、当初の目的を果たしていないことを思い出したが、さすがにいますぐ出るのは躊躇いを感じてしまう。

「どないしょ。さっきの変なヤツおったら嫌やしな」

しばしの間、台所で悩んでみたが、ここで悩んでも何もならないことを悟り、晴子は先ほどから続いている独り言とともに台所を後にした。

「ま、ええわ。さっきとちやう店行けばいいんや」

少々速回りになっても商店街の反対側から行けばいい、と思つて晴子が玄関の扉を開けるとほぼ同時に、晴子は言葉もないまま、動きを止めてしまった。

「……………」

家の前には先ほどの変な男が立っていたのだ。

「何でおんねん」

家の外に立っていた人物に向かってと言うよりは、独り言に近いものだったが、晴子の動きを止めさせた男にも聞こえていたらしく、特に表情を変えることもなく、男がごく普通にさらつと答える。

「先ほど待たれよと申していたはずだが」

ごく普通ではあるのだが、その言葉遣いはやはりおかしなものであり、それが余計に晴子の神経に障る。

「って、何で見ず知らずのおかしなヤツに、そない偉そうな言われ方されなあかんねーんっ！」

大きな怒号を男に浴びせると、晴子は素早く家の中に入り、風呂場にあった洗面器に水を入れて、またもや素早く玄関まで戻った。

「とっとと帰り！」

先ほどよりも大きな怒号と一緒に、持っていた洗面器の水を男に浴びせ、玄関の扉が壊れそうなくらいの勢いで閉めた。

晴子の声と水音と扉が閉まる音とが立て続けに過ぎた後。

いつものように静寂だけが家の中に溢れてきて、思い切った行動を取ったことで、晴子はずいぶんと落ち着きを取り戻していた。

そうなってくると、先ほど水をぶっかけたヤツのことが気になってしょうがない。勢いでやったとは言え、濡れた体に秋風は意外に堪えると言うものだ。

「まだおるんかな？ さっきのヤツ……」

そうつぶやいた後そつと玄関に行き、少しだけ扉を開けて外の様子を伺うと、玄関先に乗っている男の姿が見えた。

「げっ……まだおるし。それにあの座り方は何や？」

濡れた髪や服を気にしてる様子もなく、男は玄関の少し先で瞑想でもしているかのよう  
に、目を閉じて正座していたのだ。

これは明らかに変なヤツだ。晴子はそう直感した。しかし、このまま放って置いて、風邪でもひかれたら気分が悪いし、そもそも自分の家の前であんな風にされている、世間の目も気になる。

（一体何を考えてんねん？ せやけど…）

複雑な思いが交錯したが、あれだけされて騒ぐこともなくただじっと待つ男の態度には、ほんのわずかだが好感を抱いていたのも本当だった。

思わず水を掛けたくなるような変なヤツには違いないが、結局はそのままにしておくことも出来ない。それが晴子である。

ゆっくりと扉を開け、いまだに目を閉じたままの男に向かって言う。

「そこにおったら目立つし、濡れたもんも乾かさなあかんやろ？ 中に入り」

すると、男がゆっくりと目を開く。

「構わぬのか」

「二度は言わんで」

男の短い問いに対して、晴子も短い返事。それで男は委細承知と言うようにうなずいて、短い言葉とともに立ち上がって玄関へと向かう。

「相分かった」

数分後。

晴子と男は台所のテーブルに向かい合って座っていた。

あれから男の状態を確認したところ、思ったよりも服は濡れておらず、男の着ていた上

着がハンガーに掛けられただけだった。髪の毛もタオルで拭いただけであったが、それで十分に足りていた。つまりは洗面器の水と言っても大した量ではなかったと言うことだろう。

「で、あんた何者や？ 名前は？ 職業は？」

熱いお茶を入れた湯飲みを差し出しながら、晴子が訊ねる。

ちょうど法事で使われた客用の湯飲みをまだしまっていないからだが、水を掛けて体が冷えたのではないかと言う気持ちもあった。そんな晴子の思いを察するかのよう、男は軽く頭を下げてから湯飲みを取り、静かに一口飲んでから、晴子に答えた。

「名も生業も…いまの我には無意味なもの」

男の表情は真剣なもので、決してからかっているような雰囲気はない。しかし、それだけで晴子も納得出来るはずがなく、わずかに怪訝そうにしながら、言い方を変えてみる。

「何や、それ。怪しいやつぢやな、ほんまに。…で、何しとるんや？」

「我は我の使命を果たすために」

「ふーん、そら大層なことやな」

それが冗談なのか本気なのか、晴子にはまだ分からない。言っていることは確かに大層なことであるが、肝心なことには何も答えていないからだ。

「そのためには、あなたの力が必要なのだ」

「ふーん…って、何でうちが？」

「いまはまだ語る時ではない」

「ますます怪しいだけで、ほんまに」

『空の記憶（ゆめ）』

「さようか」

「あのなあ……いまうちが言うたんは、『さよか』と涼しい顔で流せるようなことか？」

「我にはよく分からぬが」

いくら晴子が怪訝そうにしても、男の態度には変化がない。まるで相手にされないとは言わないが、こうも見事に返されると真剣に怒る気力さえもなくなってしまう。

一向に動じる様子のない男の前に、晴子はがくつと肩を落としながら、かすかに苦笑いを浮かべた。

「はあ……何か真剣に話すんがあほらしなってきた……。ほんまにあんたって変な……や、不思議なやつぢやな」

「さようか」

「また、それかいな。……ま、ええわ。正体不明の怪しいところは相変わらずやけど、何かうち、あんたに興味わいてきたわ」

怪しい男と言えば、確かにそうだ。しかし、その言葉通りに晴子は男に対して、少なくとも興味を持ち始めていた。

「さようか」

「ははは、またや。分からんことばかりやけど、何となくうちにはあんたが悪いヤツには思えんし、どうせいまはうち一人やから、いたかったらここにいてもええで」

久しぶりに誰かと会話をしている、と言うことを実感しながら、今度は苦笑いでなく笑顔で返す晴子。

普通なら見ず知らずの怪しい男に「ここにいてもいい」などと、言わないかも知れない。

『空の記憶（ゆめ）』

だが、それは不思議な感覚だった。

会ってわずかしかたつていないのに、目の前の男に対してどこか安らぎを見出している自分に気付いていながら、それをおかしいとも思わない。

が、男がそれに続く言葉を発した時、晴子の表情が強ばった。

「一人か」

恐らく男に悪意はない。自分が言ったことに対して訊き返したただけなのは、晴子にも分かっていて。しかし、あえてそれに答えるのは辛い。

「そや…うち、一人だけ…や」

先ほどの笑顔から一転して、暗い表情の晴子がつぶやくように答えると、男は静かにそれを否定する。

「それは恐らく正しくないであろう」

こうして会話を交わしている以上、確かに一人ではない。もちろん、晴子が先に言ったのはそう言う意味ではなかったのだが、あえて否定されたことにより、少しだけ気持ち悪いらいだのような気がする。

「…せやな、少なくともいまはあんたがおるから、一人やないな」

そつと笑いながら晴子が答えると、男はさらにそれを否定する。

「いまの我は現世うつしよの身ではないが、それでも一人ではあるまい」

本当のところ何を言いたいのか、晴子にはよく分からなかった。それでも男が自分のことを気遣ってくれているように思えてならない。

と、同時に先ほどからずっと感じていた不思議な感覚が、それはこの男とどこかで会っ

『空の記憶（ゆめ）』

たようなものであることに気がついた。

どこで会ったのかは分らない。そもそも、本当に会ってるのかどうかも怪しいくらいだ。しかし、悪い心地はない。そんな不思議な懐かしさを感じながら、晴子は苦笑とともに男に告げる。

「何言うてるか、うちにはよー分からんわ…」

翌日。

かすかな物音に気付いて、晴子が目を覚ますと、どこからともなくみそ汁の香りが漂ってきた。

「ん…何や、この匂いは…」

パジャマのまま起き出して、香りのする場所へと向かう。

そして、台所を見ると、男の背中が目に入った。

「遅うござるな」

「おそ…って、何してるんや？」

驚きを隠せないままの晴子が訊ねると、そこで男は振り向いてざらりと返す。

「朝餉の支度をば」

「勝手なこと、せんといてくれるか？」

半ば呆れながら、改めて晴子は男や周りの様子を見ると、気のせいか妙に小綺麗になっているように思えた。いや、実際にあちこちが片づけられているらしい。

「このところ酒ばかりを召されているようだが、それでは体を壊そう」

『空の記憶（ゆめ）』

男がそう言いながら、流し台のかたわらに置かれた一升瓶を一瞥する。それもどうやら男が片づけたものようだ。

「大きなお世話やっ」

晴子にしてみれば、文字通りにそんなことで指図を受ける覚えはない。呆れ半分怒り半分で言い放った後、晴子はプイと顔を横に向けた。

が、男の方はそんなことなど構いもせずに、テーブルに鍋を置きながら、またもさらりと言うばかり。

「ささ、冷めないうちに召されよ」

思わず台所に晴子の怒号が響く。

「無視する気かいっ！」

そして――

それからしばらく後。

「あなた…ほんまに何しに来たんや？」

男の用意してくれた朝食を前にして晴子が、呆れ半分苦笑い半分の表情で率直な疑問を口にした。その向かいには、表情のほとんど変わらない男がいる。

「我の使命を果たすためと申したはずだが」

「…あかん…話にならんわ」

まともな答えが返ってくるとはさほど期待していなかったが、こうも見事に外れたことを言われて、ここにいってもいいと言ったことを少しだけ後悔する晴子だった。

それ以上は訊いても無駄だと悟ったのか、晴子は自分の前に並べられた朝食へと手を伸



ばし、男も以後食事が終わるまで喋る気配はなく、再び会話がされたのは、二人とも食べ終えてからだった。

「今日も酒を召されるか」

「…今日はやらん。酒の買い置きものうなったし、変なヤツもおるし」

酒の買い置きがないのは事実であるし、もし仮に酒があったとしても、変なヤツの前で泣きたくもない。だから結果として、今日は酒を飲むと言う選択肢はない。あくまでも、結果としてだが。

「さすれば何を」

「何でいちいちあんたに訊かれなあかんねん！」

「我でよければ話を伺おう」

「何で偉そーなんや？ って、そもそも何であんたに話さなあかんのか」

「一人で酒を召されるよりはよろしかろう」

外見とは少しも結びつかない喋り方は、かなり尊大な感じもするが、それでも何故か嫌な感じはしない。昨日からそれが不思議でたまらない晴子だったが、あれこれと詮索してみようがない。たぶん理屈で言い表せるようなことではないのだろう。

「っ…まあ、確かにそやな」

「一人でふさぎ込んでいてばかりでは、何も叶わぬ」

「ほんまにおかしなやつぢやない、あんた。せやけど、嫌いやないな」

そう言って晴子は小さく笑う。

酒を飲んでばかりの暮らしでは、こんな風に思うことなどなかったし、笑うことさえも

なかった。

決して忘れたわけではない。

しかし、常に晴子の頭から離れなかったさまざまな想いとそれによる責めが、この時ばかりはなくなっていた。

そう言う時間があってもいい：何にも苛まれることのない、安らいだ時間が。ふとそんなことを感じながら、小さなため息とともにつぶやきを漏らす。

「ふう：ほんまにありがたいと思うてるんよ、これでもな」

「さようか」

男は相変わらずの調子で相づちを打ってくれるが、それさえもどこか心地いい。

「あんたがいてくれるだけで、うちは独り言を言わんでええからな」

周りに誰かがいない限り、独り言には誰も相づちを打ってはくれない。本当に一人しかない場合、いくら自分を責めても誰も否定してくれないのだ。

「それは何より」

しかし、いまはこうして会話をなせる相手がいる。それだけでよかった。

敬介みたくに知ってる者ではなく、向かいの河原崎さんでもなく。

余計なことを言わずに、見え見えな余計な気遣いもしない、それでいて話しやすい：そんな普通ならいそうのない相手がいるのだから。

「ま、ええわ。そんじゃ今日は散歩でもしよか？」

何気なく外を眺めながら、晴子が提案する。

言うまでもなく昨日のことだが、まともに景色を見ながら歩いたのはずいぶんと久しぶ

『空の記憶（ゆめ）』

りだった。だから、今日はもう一度ちゃんと歩いてみよう、と思ったのだ。

「開行でもないのだから、家に閉じこもることはあるまい」

「何や、その開行言うんは…」

「修行の一つ」

「ふーん…、ま、何でもええけど、あんたも行くんやで」

「我も一緒なのか」

「当たり前や」

「あなたが困りはせぬか」

「何言うてんねん。うちが誰と一緒にいようが、誰からも後ろ指さされるようなことあらへん。それにな…」

と、そこで言葉が一旦切られ、晴子の表情が曇る。

「…一人で歩きたくないんや」

わずかな間を置いて、晴子の口から出たのは、ため息にも似たつぶやき。

決して忘れたわけではない、決して逃れることも出来ない、事実。それは自分が一人であること。

だけど、いまはそれを考えたくない。少なくとも、自分以外の誰かが、すぐ近くにいるのだから。

それが逃げでしかないと誰かに言われても、自分も分かっていたとしても、それでも一人でいたくはない、それが晴子の気持ちだった。

自分でも気がつかない間に晴子は拳をきゅっと握りしめて、男から視線をそらしている

と、男が短く答える。

「相分かった」

余計な言葉も何もなく、ただそれだけ。そして、それこそが晴子が求めていた答えだった。

こうして、神尾家に居候が一人増えて、その居候と時間を過ごす中、晴子は以前のよう  
に笑うようにさえなっていた。

神尾家から久しぶりに漏れる笑い声に、心配していた近所の者も安心し始め、ようやく  
止まっていた時が動き出したような感じがしていた。

それは確かにその通りだったのかも知れない。

観鈴を失ってからずっとふさぎ込んでいた晴子も、よく出掛けるようになったし、笑い  
もするようになっていた。

しかし、何かが動き出したことによって、晴子の笑い声はある晩を境に絶えてしまった。

三、迷まよい子

誰かが泣いている。

それは小さな女の子。

小さな手で顔を覆い、大声で泣きながら、叫んでいる。

「おかあさん……どこ行っちゃったのお」

迷子にでもなったのか、しきりに母を呼ぶが、誰もそれに答えない。

そもそも、周りに誰かがいる様子もない。

誰もいないところで、ただ一人だけ女の子はずっと母を捜して泣き続けているだけだった。

不意に誰かが女の子のそばに現れた。

「おかあさん？」

女の子が戸惑いながら訊ねると、その人は笑って答えた。

「うちは晴子おばさんや。せやけど、これからうちがあんたのお母さんやで」

「…晴子おばさん？」

「確かにあんたから見たらそうかも知れんけど、この歳でおばさんなんて呼ばれたないわ」

「……」

女の子が返事に困っていると、晴子は呆れながらつぶやいた。

『空の記憶（ゆめ）』

「まだ十代やで、うち……。ほんまにこの子預からなあかんの？」

目の前にいる子どもに聞こえようが、晴子にとってはそんなの大した問題ではなかった。そもそも、どうして自分がこんな面倒を負わなければならないのか、そんなやり切れない思っただけしかない。

だが、そんな晴子の思いなど知ってか知らずか、女の子は少しだけ戸惑いを見せた後、笑って晴子に向かって言った。

「……じゃ、おかあさんって呼んでいい？」

「何でうちがあんたのお母さんなんや……って、そうやな、他に呼び方あらへんなあ。晴子さんじゃおかししいし、晴子姉さん言うんも何かアネゴみたいやし、ま、好きにしたらええわ」

その返事を受けて、女の子——観鈴が晴子の手を掴もうとすると、とっさに晴子は手を引っ込めてしまう。

「……手……」

「一体何のつもりやっ」

「……みずずの手……」

「ああ、それはあんたの手やな」

「……おかあさんの手……」

「せやから、一体何をやりたいんやっ」

「……」

観鈴が黙り、晴子は観鈴をじっと見つめる。

「怒らんから言うてみ」

その言葉の内容とは正反対に、怒気混じりの口調で晴子が促すと、観鈴はようやく口を開いた。

「……手をつないでいたい…おかあさんと」

「うちはあんたのほんまのお母さんと違うんや」

「……でも、おかあさんとはなれたくないから……」

観鈴の言葉に隠された意味を悟ってか、にわかには晴子の表情が険しくなったが、すぐに晴子は呆れたように笑って返す。

「さっき言うたやろ、うちがお母さんやて」

そして、ぶっきらぼうな調子で、観鈴の方に手を伸ばす。

「ほれ」

「……」

晴子の行動にわずかながら戸惑いと期待とを感じて、観鈴は差し出された手を見つめるだけで、何も答えなかった。

「何してんねん」

さすがにそんな状態で長く我慢出来る晴子ではなく、わずかに苛立ちを言葉に表すと、そこでようやく観鈴がその手をぎゅっと握りながら、

「うんっ」

と笑ってみせた。

「これでええな？」

『空の記憶（ゆめ）』

「うん」

晴子の問い掛けに、観鈴は満面の笑みで答えた。そして、その笑顔に安心したように、晴子が歩き出す。

「どこに行くの？」

「帰るんよ」

「うん、おかあさんと一緒に帰るんだよね」

「せやな」

晴子の答えに観鈴がまたも嬉しそうな笑顔で返し、一緒に歩き出した。

しかし、帰り道の途中。おもむろに晴子が観鈴に向かって、言葉を発した。

「せやけど……うそつきはうちの子やあらへんのや」

「え……うそ？」

「そや。あんたは最後にうちにうそついたやろ」

そう語る晴子の表情は厳しく、それが冗談ではないことを如実に物語っていて、思わず観鈴の言葉が詰まる。

「わたし……」

「ついたやろ？」

「…うん、うそついた」

そう答える観鈴は、それまでの小さな女の子ではなく、晴子と一緒に頑張ったショートカットの観鈴になっていた。しかし、大きな観鈴を前にしても、晴子の口調は変化がない。それどころか、さらに厳しい口調になっていた。



「そないな子はうちの子やあらへんって」

「でも……わたし…頑張ったんだよ…」

「あなたがどない頑張った言うても、何でうちにうそつかなあかんねん？」

涙声で言い返す観鈴に対して、晴子ははっきりと怒気混じりのきつい口調で問いつめる。

「お母さん……」

「あんたはうちを騙したんや。ほんまにひどい娘がおったもんやな」

「違うよお……」

「何も違うことあらへん。あんたはうそつきで、ひどい娘なんや」

「違うよ、だってお母さん大変だったから……」

「せやからそれがどないや言うねん！ あん時二人で一緒に頑張る言うたんはうそやったんか！」

「そうしないとお母さんも……」

一緒に頑張ってくれた人がいる。それがどれだけ観鈴にとって助けになったのかはいくら言葉尽くしても語れないほどだ。しかし、それが自分にとって大切な人であればあるほど、頑張っていると言うより無理してるのを見るのが辛かった。

だから、観鈴はうそをついた。

「大きなお世話じゃっ！ あんたと一緒に死ねるんなら、それは本望っちゅうやっちゃ。

なのに、あんたは最後にうちにうそをついたんや。うちが無理すんの見てるのが辛くて逃げただけや！」

「違う…違うよお……」

「あんたみたいな子は帰って来んでもええっ」

「いやっ、帰りたいっ！ お母さんのところに帰りたいよっ」

「そないワガママ言う子はますますうちの子やあらへんわ」

「お母さん！」

「うちはあんたのお母さんとちゃう、晴子おばさんや」

「ううん、お母さんだよ。一緒に頑張ってくれたお母さんだよっ」

「その一緒に頑張ってくれたお母さんに、うそをついたのはあんたやで」

その途端、晴子の姿が消え、真っ暗闇の中に観鈴は取り残される形になった。

誰もいない場所。

観鈴は一人で泣き叫んでいる。

「おかあさんっ！ どこ行っちゃったの？」

真っ暗闇の中、観鈴の姿もまた小さな女の子に戻っている。

そして、また繰り返される、悲しい夢。

観鈴は何度も晴子を呼び、また非難を受け、置いて行かれる。

何度も何度も、繰り返される。

何度も何度も……。

まぶたに明るさを感じると同時に、晴子は目を大きく見開いて、勢いよく体を起こして  
いた。

「何や、いまのは……」

と、晴子は自分の状況を見て、それが夢であったことを理解した。しかし、夢の内容は晴子にとって嬉しいものではない。

「何でこないな夢見なあかんねん」

これまでも観鈴の夢を見なかったわけでもない。ただ、それは観鈴と過ごした短い夏の日々の思い出や、小さかった頃の観鈴の笑い話の類だった。

先ほどまでの光景——泣いている観鈴と、それをなだめて一緒に帰る自分。

そこまでは確かにあったことかも知れない。

しかし、問題なのは、その後だ。

「何でうちがあの子を捨てなあかんの……」

うそをついたから……と言って、観鈴を置き去りにする自分の姿。

これがどんな意味を持つのか、晴子には分からなかった。分かりたくもなかった。

どんなにうそをついていようが、晴子が観鈴に対して「帰らんでええ」などと言う道理はない。そんなこと、いまの晴子に言えるはずがなかった。

「何でっ……」

そこで言葉が詰まり、布団の上に雫が落ちて、小さなしみを作る。

このところは男のおかげもあって、少しずつ元の晴子に戻りつつあったのだが、それが夢であっても、自分が観鈴を捨ててしまったと言うのは、許容範囲をはるかに超えてしまった。

「うちは……」

さらに雫が続いて落ちる。

その後、何も言えずに晴子はただうつむいて、きゅつと唇を噛みしめたが、布団の上のしみは大きくなるばかりだった。

どうしようもなく悲しかった。

観鈴のことを捨ててしまう夢を見ることがではなく、自分がこうして現実に生きている限り、いつか本当に観鈴を捨ててしまうような気がしたことが。

どうしようもなく許せなかった。

観鈴のことを忘れていたわけではないのに、自分は変な男のおかげで笑えるようになっていたことが。自分だけが楽をしているような気がして、たまらなかった。

「うちはっ…」

その後はもはや言葉にならず、すでにぐしゃぐしゃになっているだろう顔を拭こうともせず、晴子は体を震わせるだけだった。

しばらくしてから、朝食の支度を終えて待っていた居候が晴子の部屋にやって来た。

ここしばらくの間は晴子もまっとうな生活を営んでおり、今朝に限って遅くなっている晴子の様子を伺いにきた、と言うのが正しいところだが、それは晴子にとってはあまり嬉しくない。

「いかがでした」

いつもと変わらぬ口調で訊ねる居候に向かって、晴子は涙で濡れた顔を拭いながら、どこか冷めた言い方で返す。

「…悪いけど出てってくれへんか？」

晴子は「この部屋から出ていって欲しい」と言う意味ではなく、「この家から出てい

『空の記憶（ゆめ）』

て欲しい」の意味でそう告げた。

それを理解したのか、居候の方は部屋から出ずに、短く訊き返す。

「理由はいかに」

「わけも何もあらへん…。うちが出てって欲しいだけや」

「また一人になるつもりか」

「…っ、一人やあらへん！　うちは…あの子と一緒になんやつ」

「さようか」

「そや！　だから、あんたは邪魔や」

「それは違うであろう」

感情的になってしている晴子とは対照的な居候の冷静な物言い。その穏やかな物腰には、晴子を圧倒するほどの強さがある。

「なっ、何言うてんの…あんたが邪魔や言うたら邪魔なんや」

「娘の夢をご覧になったか」

「なっ…」

思わず晴子の声が詰まる。

「娘が一人で泣いている悲しい夢を」

「何で…：…あんたが」

それを知ってるんや…とは言葉が続かなかった。

そんな夢はいままで見たことはないし、さっき見た夢のことを居候に話して聞かせたことがあるはずもない。居候が当て推量で言ってるとも思えない。

「…あんたは一体何者なんや……」

怪訝そうにしながら、当然のように湧いて出た疑問を居候に投げかけてみるが、居候の方はそれに対してすっと目を閉じて答えるだけ。

「逃げてはいかん。いまは辛かろうが、その夢から逃げてはいかん。娘がそうしたように、あなたも自分のなせることから逃げてはいけない」

「何やねん…それ…」

「娘を救いたいのではないか」

「そないなこと出来るはずないやろっ」

すでに死んでしまった者を救うと言っても、それは丁重に弔う程度のことではない。

そう思つて、晴子は居候の下らない問いを、問髪入れずに否定した。

「何故、そう思われるか。何故、自分の力を信じられぬのか」

「自分の力つて…うちなんかにそんな力あるはずないわっ」

観鈴の本当のことを分かつてやれなかった自分。

忘れたいと心のどこかで願い、何も出来ずにただ逃げてばかりいた自分。

そんな自分に、観鈴を救う力なんてあるはずがない。だいいち、そんな夢みたいなことと言われても、あっさりと思はれるほどめでたい人間でもない。

万が一観鈴を救う方法があったとしても、力も何も無い駄目な自分には、それを叶えることなど出来るはずもない。

救えるものなら救つて欲しい。だけど、それをなせるのは自分ではなくて、もっと強い人間に違いない。それが晴子の結論だった。

『空の記憶（ゆめ）』

「うちんかがあの子助けられるはず……ないんや！」

それ以上は何も考えたくないとはかりに晴子が叫ぶと、居候はそれ以上何も言わず、晴子の部屋から静かに出ていった。

その後、晴子は何をするでもなく、ただぼんやりと時を過ごすだけだったが、ふと思いついたように観鈴の部屋へと向かった。

観鈴の部屋は生前と変わらないまま置いてあり、唯一異なるのはその部屋の主が部屋に入るものがなくなったことだけだ。それだけなのに、部屋の中の空気は重く冷たかった。

観鈴が使っていたベッドも机も、可愛がっていたぬいぐるみもすべてそのままなのに、何もかもが沈んでいるような感じがした。

晴子はその中に入り、床に転がっていたぬいぐるみをそっと手にとって、つぶやく。

「なあ…あなた…うちにどないして欲しいんや…」

そう訊いたところで、ぬいぐるみはもちろん答えない。

「あなたは一体何のために頑張った言うんやろな…」

もう一度ため息混じりにつぶやくと、今度はそれに返事があった。ただし、それは観鈴でもぬいぐるみでもなく、いつの間にか部屋の入り口にいた居候のものだった。

「空の悲しみをなくすため」

「…何や、それ」

「かの娘は空に囚われていたもう一人の娘を救うため、そして悲しいことを繰り返さぬために」

空にもう一人の自分がある…とは、観鈴に聞いたことがあった。その子のためにたくさ

んの人が悲しい思いをしているとも。そして、観鈴はそれをなくすために頑張るとも確かに言っていた。

だが、いまさらそれが何の意味を持つだろう。

「何や、それ…、何であの子がそないなことのために頑張らなあかんの？ 何でそれで死ななあかんの？」

たくさんの人が悲しんでいたから、空にいる女の子が悲しんでいたから、と言ってどうして観鈴だけがあんなに辛い思いをしなければいけないかったのか。理想とか理念とか綺麗事ですませる分には、それは確かに凄いいけなかつたのかも知れない。しかし、観鈴が…自分の娘がどうしてそれを負わなければいけないのかと言う話になると、綺麗事ではすまないのが親と言うものだ。

「最後まで頑張ったやないか！ なのに、何で…：…ゴールって言ううちの中で…：」

もう十分頑張ったからゴールするね…と言って、自分の腕の中で眠りについた観鈴の温もりを晴子は忘れることはない、絶対に。

自分の腕の中の温もりが徐々に失われて行くのを感じながら、一生懸命起こそうとした。

何度も観鈴の体を揺すった。

何度も大声で怒鳴った。

しかし、温もりが戻ることはなかった。

文字通り、娘の死を肌で感じていたのだ。それがどれほどのことなのか、晴子以外に誰も知り得ることではないし、それを軽々に口にする事など、誰にも出来ないはずだ。

「娘の努力には感謝の言葉もない」



「って、あなたに何が分かるって言うんや！ とっとと出てき！」

もう終わりだと思っていた、苦しみや悲しみは。

楽しい夏の始まりだと思っていた。

だが、それが晴子にとって、観鈴にとって、夏の終わりだった。

「それですべてが終わりではないのだ」

「そんなん関係ないつ、とっととここから出てき！」

「悲しみは解放された。だが、悲しみの記憶を持ったままでは帰れない」

居候が何のことを言ってるのか、晴子にはよく分からなかった。

それよりもいまは何も聞きたくはなかった。これ以上辛いことを思い出したくはない、と。

「…聞きとないわ」

「幸せな記憶を最後に…それが我と我を遣わした者たちの、ただ一つの願い」

晴子が拒否の意思をあらわにすると、居候はそれだけを言っただけを消した。その言葉は相変わらず晴子には理解できなかったが、それでも「幸せな記憶を最後に」と言う部分だけは、少し引っかかった。

観鈴はどうだったのか、と。

しかし、その自分への問いに対して、晴子は明確に答えることが出来なかった。

一体自分に何が出来たのだろう、と。

「…結局、うちはハナツから逃げてだけや……」

十年前は観鈴に深入りしないように、距離を置くことにした。それは病気のせいばかり

ではなく、本当に正面から観鈴を受け入れることから逃げていただけではないか。

だから、たとえ夢とは言え、観鈴が泣いていても、それを止められないのは当たり前ではないか。

自分はずっと逃げてただけで、何もしてやれなかったのだから。

「あの子が泣いてても、何もしてあげられん…ほんまに駄目なお母さんやな」

ふと、口をついて出た「駄目」と言う言葉。

居候が来てからは一度も出ていかなかったが、それより前はどれほど繰り返していたらう。だが、その居候にも「出ていけ」と言っただけである。

「あの変なんもどこぞに行きよったようやし」

居候がいなくなれば、また自分一人になるだけ。居候がいてもいなくても、観鈴がいないうことには変わりがない。ただ、それだけのこと。

「もう、どないなっても構へんよな…」

のそりと立ち上がり、観鈴の部屋から出ていくと、廊下にはまだ人の姿があった。先ほど「出ていけ」と言っただけの居候がまだいたのだ。

「酒はやめられよ」

「何や、まだおったんか…。ま、うちほうちで勝手にするさかい、あんたも勝手にしたらええわ」

居候らしい相変わらずの忠告だったが、まだいたことに対して、その余計な忠告に対しても、晴子は特に何とも思わなかった。

「それで娘が救われるか」

「それがどうやっちゆうねん。あの子が悲しい悲しい言うて泣いてるだけやのに、うちは何も出来へんのや」

いくら夢で泣いてても、現実に観鈴をあやすことなど出来るものではない。かと言って、それを平然と割り切れることもない。それがいまの晴子の状態である。

「何も出来へんのや……うちには何も……」

「頑張ったのではないのか」

「頑張ったのはあの子や。うちやあらへん」

「一人で頑張れるものではない」

「もうどっちでもええんや」

それ以上の居候の言葉をさえぎるように、晴子は言葉が続けた。

「頑張っても死んでしまつたら、それでオシマイやないか……」

そう言いながら、晴子はかすかに笑ってはいるが、それは決して楽しい笑みなどではなく、どこか冷めた自嘲の色を含んだ笑みだ。

「最後にうそまでつかれたんや……」

冷たい笑みがさらに歪みを増す。涙をこぼしてはいなかったが、それは泣き顔に限らず、近いものになっていた。

「うちにはもう……」

そこで晴子の言葉が途切れると、居候は眉間にしわを寄せて、短く返した。

「さようか」

そして、晴子に向かって一礼をした後、廊下を静かに進んで行った。

『空の記憶（ゆめ）』

ゆらり。

影がゆっくりと動いている。

いつの間にか暗くなっていた居間の中、一つの影がゆらりと動く。

自分の居場所を探しているのか、それともただ時折窓から入る冷たい風に揺られているだけなのか。または、その両方か。

まるで魑魅魍魎の仲間であるかのように暗い中をうごめくのは、いまこの家にいるただ一人の生者であるはずの晴子。しかし、その動きは生者のものとは言えなかった。

「なあ…いま死んだら、あんたのどこ…行けるんか？」

暗くなった居間のため息のようなつぶやきが漏れる。

「そしたら、また二人で楽しく過ごせるよろか」

また、一人になってしまった。

いまここにいるのは自分一人だけ。

自分でそれを望んでおきながら、そんな静けさの中にいるのはもうたくさんだと、心底から思っていた。

どのみち、居候は居候に過ぎないし、観鈴が自分の元に帰ってくることなどあり得ないのだ。

だから、

「お母さんもそっち行ったら…あかんか？」

もう、一人でいるのはいやだった。

だから、

「ええやる？ そうすれば、あんたが一人で泣くことないやないか」

もう、一人で泣いていたくはなかった。

だから、

「な、そうしょ？」

返ってくるのではない間いを続けながら、晴子はゆっくりと決めた。

「うちも、もう…ええやる？」

観鈴のことを忘れることなど出来ずに、かと言ってそれを昇華することも出来ずに、ただうずくまっていただけかも知れない。

居候が来て、ふと日常の生活に追われるようになり、心が軽くなっていたような感じがしたのは、観鈴のことを忘れていただけなのかも知れない。

区切りをつけようとしていたはずなのに、結局はただ逃げていただけなのかも知れない。だが、もうそれでも構わない。

自分一人ではどうしようもないのだ。

観鈴の悲しみを癒すことはもちろん、自分の気持ちの整理さえも。

「これでも…頑張ったんよ」

それで十分だったのかどうかは、正直なところ晴子にも分からない。それでも、もう限界だと思った。

これ以上は一人で頑張ることなんて、出来そうにない。そもそも、観鈴がいない世界に、自分一人だけが生きていたとしても、意味がない。

だから、もう生きていてもしょうがない——それが晴子の結論だった。

いつしか晴子は、どこか寒さを感じる秋の夜をさまよっていた。

寒いのはそう感じるだけで、実際にはそれほどでもないかも知れなかったが、そんなことはもう晴子にとつて、どうでもいいことであった。

どうやったら死ねるか。

そのためには、どこへ行けばいいのか。

それだけを考えながら、夢遊病患者のように町をあてどなくさまよっていた。いや、そんなことを本当に考えて行動しているとは、すでに言えないだろう。

自動車が通り過ぎる道に出てみようか、などと頭のどこかで思いながら、いざ行動となると、いつも自分が飛び出すよりも先に自動車が通り過ぎてしまうのだ。

そもそも、夜にもなれば行き交う自動車の数もめっきり減り、急に静かになるこの町である。飛び込んだところで、軽い怪我程度ですんでしまい、生きたくもないのに、病院でさまざまな治療をされて、生かされてしまう可能性の方が高い。

それならばと、晴子はゆっくりとした足取りで海岸に向かおうとした。

しかし、海岸の堤防を前にした時、晴子の足はそこだけが石にでもなってしまったかのように、びくりとも動かなくなった。

ゆっくりと動かそうとしても、前には進まない。自分の足を、手で持ち上げようとしても、足が地面から離れることはない。

やっつて晴子自身は真剣そのものだった。それだけに、はたから見れば、かなり滑稽

『空の記憶（ゆめ）』

だったろう。

が、いくら動かそうとしても、晴子の足は海岸に近づこうとはしなかった。

思い返してみれば、それは当たり前だったのだ。

海岸にはもう二度と行かない。

そう決めていたから。

ぼたり。

波の音に混ざり、雫が落ちる音がする。

ぼたり、ぼたりと、それは続く。

雫の落ちる音を消すように、優しく打ち寄せる波の音が、堤防の向こうから届く。本来なら心を安らげるであろうその音も、この時だけは冷たい拒否の意思を表しているように思えた。

それから、どこをどうさまよっていたのかさっぱり分からないが、気がつくと晴子は神社にいた。

すでに夜も遅い時間であり、人の気配など何もない神社に。

「…何で、うちはここにおるんや…」

かなり歩き回ったはずだが、死ぬ場所を探していたのにどうしてこんな場所に来てしまったのか。

唐突に、どうしようもない自分への怒りがわいてくるのが分かる。

「死ぬつもりやったのに、神社に来て何をするつもりなんや…」

いまさら神頼みでもあるまいに、ましてやこんなところで死ぬと言うのもどこか釈然と

『空の記憶（ゆめ）』

しない。

「あほやっ、うちは大はかやっ…」

たまらずに自分への叱責が口をついて出てくるが、その時点で晴子は気がついてしまったのだ。

自分は本当に死ぬつもりでさまよっていたのではなかったと言うことに。

確かに死にたいと思っていた。

しかし、それを叶えるような場所に行き、それを実行しないまま、こうして神社に来てしまった。

いくら何でも神社の境内で自殺とは気分が悪い。まして、ここは大切な思い出の場所でもあり、汚したくはなかった。

それが何を意味するか。

死にたいと思っていながら、本気で願っていたのではなく、本音はみつともないくらいに、死にたくないと思っていると言うこと。

「死ぬことも出来へんのか…うちは…」

自分の不甲斐なきにどうしよもなく呆れながら、晴子が捻り出すようにつぶやくと、そこへ別の声が重なった。

「それは違う」

短く、そして強く、はっきりとした言葉。大きな声ではなかったのに、遠くまでも届きそうな不思議と通った声。

「…誰や」



『空の記憶（ゆめ）』

その声の正体を確信しながら、晴子が力なく訊き返すと、神社の木々の間から一人の男が現れた。

「あなたは本当に強い方なのだ」

いつからそこにいたのか、どうやって現れたのか。そんなことを疑問に感じることなく、その男の姿は晴子の確信した通りのものだった。

「あんたかい…。それにしても、よおそんな風に言いきれるもんやな」

「それが真実なれば」

真顔で返されても、いまの晴子にそれを茶化すようなことは出来ない。そればかりか、目の前にいる男——居候の言葉を信じたいと思っている自分の気持ちに気付くくらいだった。

「さよか…。ほな、ついでに訊くけど、何であんたはそんなにはっきりと言えるん？」

何故そんな言葉が自分の口から出たのか、晴子にもよく分からない。ただ、何かを話して欲しかった。

「長い話になるが、構わぬか」

「…ええで。秋の夜長にはちようどええつもんやろ…」

「永い時、我は見てきた。現世うつしよの変わり様を、人の生き様を。そして、繰り返される悲しみを」

それは千年ほど昔の話。

ある晩に突如として、古い山寺に陰陽師の一団が多数の兵士を引き連れて、攻め寄せて

きた。

寺のあちこちに火を付けて回り、建物を破壊して行く様はどこか狂気じみていたが、兵士は口々に「悪鬼を奉じる輩を殺せ」と叫び、その表情には明らかに恐怖の色があった。

彼らの言う悪鬼とは、翼人のこと。

彼らが現在焼き討ちをしているのは、その悪鬼を長いこと守っていると噂されていた山寺だった。

だが、彼らが寺に火を付け回っている頃、寺はほとんど無人であった。

「始まったようでございますね」

岩屋の奥で、幼子を自分の胸に抱きながら、裏葉が周りにいる者に向かって低く告げた。

「さすれば、我らも兼ねてからの手はず通りに」

岩屋の奥に小さな護摩壇があり、その周りにいたのは、幼子を抱いた裏葉と知徳法師、稜栄、その他に僧が四人。

「本当にこれで出来るのですか？」

心配そうに裏葉が訊ねると、稜栄がそれに答える。

「裏葉殿が心配するに及びません。寄せ手が来るのは、兼ねてから承知の上でありましたし、こうして我らが残るのはこの術を成すためゆえですから」

「ですが、この術は長いこと行われていないと聞き及んでいます。もしも皆様の身に何かありましたら……」

これから行われる術とは、古くは空真理から伝えられたものの一つで、長い間実際に使われたことがないものだった。だが、そこに集まっている僧たちはいま、それをこの場で

行おうとしていたのだ。

「ご母堂様のご心配はもったもなれど、我らとて慎重に準備しておりましたから。そのために、もっとも力が働きやすい晩を選んだのですからな」

稜榮のかたわらにいる若い僧が言うと、知徳法師が落ち着いた口調でそれに続く。

「それは寄せ手にとつても攻めやすい日取りであることなど、もとより承知。なればこそ、いまここで裏葉殿が案ずることはありませんまい」

「さよう。裏葉殿は柳也殿と神奈様を知る大切なお方でありますゆえ」

これから彼らが行うのは、瞬きをする間に遠く離れた場所に人を移動させると言うもの。それを確実に行うには、術を掛ける力もさることながら、移動する者にも方術の心得が必要だった。

そもそも陰陽師が兵を連れて寺に攻め込むことなどは、知徳法師もすでに知っていたことで、こうなる以前に裏葉たちを寺から逃げ出す手はずを取らなかつたのも、すべてはこの術のためであった。と言うのも、寺から徒歩で先に逃げたとしても、すでに攻め込む手はずを整えている者たちを避けて行くのは、困難を伴うと言うものだ。

それならば、瞬く間にはるか遠くの地に移動出来る術を使って、少なくとも裏葉と幼子だけは安全な場所に届けようではないか……これが知徳法師以下の寺の僧たちの意見であり、願いでもあった。

裏葉を逃がすことを悟られてしまつては、意味がない。何故なら、攻めて来る者は、寺にいる者全員を殺すはずであるから。そこで、知徳法師とその高弟たちだけが術の施行のために寺に残り、他の僧侶はみな徒歩で寺を離れることになった。もちろん、寺から出て

いった僧侶がみな無事に他の地にたどり着ける保証など、皆無に等しいことは誰もが承知していた。

「皆様も、どうかご自分の身を大切になさって下さい」

「それでは」

知徳法師の短い言葉とともに、己の方術の力を高めるためにそれぞれの僧が目を閉じて、寺に伝わっている文言を唱え始めた。

この術が難しいのは誰もが分かっていた。しかし、誰も臆することはない。術を掛ける知徳法師たちも、それを受ける裏葉も。何故なら、彼らは皆お互いの力を信じていたから。

そのために周到な準備を怠らなかつたから。

そのために修行をしてきたのだから。

僧たちの唱える文言が、徐々に高さを増していく。と同時に、裏葉にも徐々に僧たちから放たれた方術の力が集中していく。

寺のあちこちで上がる聞の聲がいつの間にか、彼らの耳に入らなくなり、高まり続けていた声と力が、さらに一点にへと集まっていき――

突如として、それは光を放つ小さな点へと変化した。

光を放つ小さな点は、すぐにその光の範囲を広げ、裏葉と幼子を包み込んでいく。

方術が成功したのだ。

「皆様、くれぐれもご無理はなさらぬように」

光に包まれていく中、裏葉が知徳法師たちに告げると、術の成功を確認して安堵の表情を浮かべていた知徳法師が頭を下げた。

「裏葉殿、幼子のこと……神奈様のこと、くれぐれもお頼み申す」

裏葉もそれに答えるように頭を下げたが、裏葉も幼子も光に包まれたのと同時に、一瞬だけ光が強さを増し、光はすぐさま消えた。

「法師様」

その場に残ったのは短い言葉だけで、先ほどまで裏葉と幼子がいた場所には何もなくなっていた。

まずは裏葉たちを遠くに逃がすことは成功した。

僧たちが皆安堵の表情に包まれた中、知徳法師が姿勢を正してから、ゆっくりと告げる。

「稜栄殿、それに皆よ。本当にこの年寄りの頼みを聞いてくれるのだな」

「知徳法師様、我らの心はすでに決まっております」

「これも神奈様のために」

「それにご母堂様のために」

知徳法師の問い掛けに、稜栄と若い僧侶が次々に答えた。

「稜栄殿、御身には一番の苦勞をお願いすることになるが、すまぬ」

「それは承知の上なれば、この稜栄、進んでお役目を受けました」

これから彼らがやろうとすること。それは、先ほどの術よりもさらに困難を要する術だった。

それは、浮雲の秘術と呼ばれていた。浮雲のように術者の魂を肉体より解き放ち、長い時間を意識を保ったまま存在出来ると言うもので、方術師が相手であれば会話を成すことさえも可能である。

これにより、術者の肉体は失われるが、その術を行った者の知識や記憶をもすべて受け継ぐことが出来るもので、これは空真理の最大の術（翼人の記憶の継承のこと）に倣ったものである。

しかし、この術の問題は、術を掛けるには相当の力があることと、掛けた者のほとんどが落命することにある。優れた術者の、力だけでなく文字通りすべてを使い果たす術なのだ。

また、それだけの犠牲を払っても、浮雲（意思だけの存在のこと）になった者が、次なる者と同じ術によって、すべてを渡すことは不可能であり、意思自体の気力が尽きた時点でそれは消えてしまうものだった。

そんな術を彼らはやろうとしていた。

浮雲となるのは、稜榮。

術の要を担うのは、知徳法師。他の四人の僧も、それぞれが気を高め、術の力を要とする知徳法師に集中させ、知徳法師はそのすべてを稜榮に向けて放つ。

稜榮は放たれた術に身を委ねることで、己の意思を解き放ち、術が完成する。

手はずは決まっていた。

今夜を選んだのも、裏葉たちを逃がす術のためと言うよりは、浮雲の術のためであったし、護摩壇もそのために用意されたのだ。何故ならこの岩屋は空真理がいたとされるだけあって、特に大変な術を行うのに向いている場所だったのだ。

「それでは、すぐに掛かるうか」

「はい」

岩屋の入り口から一番奥に知徳法師が座し、護摩壇を間に向かいに稜柴。後の四人は知徳法師を頂点とする五角形の四つの点に座る。

そして、それぞれが先と同じように、空真理から伝わった文言を唱えながら己の方術を高め始めた。

寄せ手がこの岩屋を見つけるのも、寺を焼き尽くすのも、それほどはかからないだろう。いずれにしても、時間はあまり残されていない。

それだけに僧たちは必死に文言を唱え、護摩を焚き、着実に術を進めていく。焦って集中が途切れれば、それまでの努力は水泡に帰してしまふ。二度も術を続ける力もなければ、時間も無い。許された機会は一度のみなのだ。

やがて、文言が止まり、岩屋には護摩が焚かれる音だけとなった。いや、先ほどまでよりも荒々しい物音が近づいているのが、よく分かった。恐らくはすでに岩屋の前まで来ているのだろう。

しかし、まだ術は終わっていない。これからが正念場である。

知徳法師を頂点にした五角形の四つの点にいた四人の僧たちが、ゆっくりと両手を揃えながら知徳法師に向けた。文字通り、己のすべてを渡すために。

ゆっくりと、そして確実に、四人の放つ方術は知徳法師へと流れていく。

やがて、ぷつりと糸が切れたように、一人の僧の手が床に落ちる。と同時に体も支えるものがなくなつたように、前に崩れてしまった。

それを追うようにまた一人、さらに一人と続き、四人とも崩れて動かなくなると、知徳法師はそれまで以上に苦痛の表情を見せていた。

『空の記憶（ゆめ）』

いま、四人の僧たちの、意思も記憶も力もすべて知徳法師とともにある。それをさらに高めた上で、護摩壇に向けて出すのが知徳法師の役割だ。

岩屋の前の物音はさらに激しさを増していた。扉を打ち破ろうとしているらしく、激しくぶつかる音が続く。

だが、ここで焦るわけにはいかず、知徳法師は四人のすべてをしっかりと受け止め、さらに己の中で術を高めてから、一気に溜めた術を護摩壇に放った。

一気に護摩壇の炎が激しくなり、炎は岩屋の天井までも届いていた。

後は稜栄が己をその炎に投げれば、それで手はずは終わりだった。

だが。

稜栄が立ち上がった瞬間、稜栄の後ろの扉が打ち破られた。

「お主らが悪鬼を奉じる僧どもか！」

激しく立ち上がる炎に臆することなく、大きな怒号とともに太刀を手にした武者が乱入してきた。

そして、

「はあっ」

気合いとともな武者は、太刀を稜栄の背中に振り下ろした。

「知徳様！」

「稜栄殿！」

稜栄と知徳法師の叫びが交錯する中、稜栄の背は深く斬られ、護摩壇に近づく前に倒れてしまう。



すでに術は護摩壇に放たれている。この状態で、稜栄が護摩壇に身を投じることが出来さえすれば、それで終わりだった。

「何故に我らを討つか」

閉ざされた目を武者に向けて、知徳法師は威圧するように静かに語る。威圧して相手が止まっていれば、その間に稜栄が動ければそれでいいと考えたのだ。

「悪鬼を奉じる者に答える理由などあるわけなからう」

知徳法師の問いに対して、武者は強く言い放つとゆっくりと護摩壇へと歩き出した。

いまここで術を台無しにしてしまつては、四人の僧と稜栄の命が無駄になってしまう。

しかし、このような形で術が叶うかどうかは、知徳法師ですら分からなかった。

どうしたものかと知徳法師が悩んでいると、先の一撃ですでに瀕死となつていた稜栄の声ならぬ声が、知徳法師の頭に響いてきた。

（知徳様……拙僧は……まっとう出来ぬゆえ……どうか……）

「稜栄殿……」

重いつぶやきを漏らし、知徳法師が立ち上がる。

成功するかどうかはすでに分からないが、稜栄もそれを承知の上で、後事を知徳法師に託したのだ。

「恐怖に怯える者たちよ。お主らの為してきたことがいかなことであろうと、我らはお主らを恨みはせぬ。だが、覚えておくがよい。お主らの言う悪鬼などどこにもいないことを。それはみな人の心に住まうのだと言うことを」

近づこうとする武者に向かって、強い口調でそれだけ言った後。

知徳法師はいまなお激しい勢いを失っていない護摩壇の炎へ、己の身を投じた。

「殺せーっ」

炎に包まれた瞬間、遠くで武者の叫ぶ声したが、すぐに何も聞こえなくなっていくた。熱いはずなのに、それを感じたのもほんの一瞬。

痛いはずなのに、それもほんの一瞬。

炎に包まれたと同時に、わずかな時間でその炎は自分の肉体を焼き尽くしてしまい、不思議な感覚とともに知徳の意思だけが離れて行った。

そして、知徳が気がつくと、眼下に燃える寺が見えていた。

術は正しく発効したのだ。

これで稜梁たちの命も無駄ではなくなる…と知徳は安堵して、先に逃がした裏葉たちのもとに向かおうと念じてみた。

が、知徳の意思とは別に、知徳は裏葉のいる場所に行くのは叶わなかった。

浮雲となったなら、距離などは一切関係なく、行きたいと願う場所に行くことが出来るはずだ。

しかし、知徳は行けなかった。

そればかりか、どんどん寺から離れていくばかり。

どれだけ念じても、地表が近くなることはない。

何故だろうか。

あるいは浮雲の術とはこうしたものだったのか…と、知徳が悩んでいると、ふと何かの存在を非常に近くに感じた。

と、同時に、すべてを理解出来た。

すぐそばに感じられたのは、神奈の存在。

（神奈様…、そうか、我は……）

知徳は空に、神奈のいる空に、神奈に囚われてしまったのだ。

浮雲となった時は、裏葉たちのことを案じていた。裏葉たちの助けとなるためにこうなったのだから。しかし、裏葉たちへの思いよりも、さらに強い思いが知徳にそれをさせなかった。

それは、神奈への思い。

それこそが、知徳を神奈のいる空に縛り付けたものだったのだ。ただ、神奈に囚われたと言っても、神奈が望んでやったことでないので、知徳自身の意思までもが囚われることはなかった。つまり、知徳は己の意思は明確に持ち続けることは出来たのだ。

（我もまだ修行不足…と言うことであるか）

稜榮ら高弟たちの命を払ってまで行使した術なのに、それがこうして成功したと言うのに、知徳は悲しかった。

知徳はそこから動くことだけが不可能になっていたのだ。

知徳に出来たのは、ただ考えることだけ。

あるいは、空に届いた想いがあれば、それと神奈の持つ翼人の力をつなげて、ほんのわずかなだけ想いを叶えられたことぐらい。

だが、空に届くような想いなど、ほとんどなかった。まして、自分が解放されるようなものなど、あるはずもなかった。

さらには、神奈のそばにすることで、神奈がずっと囚われている悲しい夢さえも身近に感じ取れるようになり、それもまた知徳を苦しめた。

こうして知徳がそばにいてもなお、神奈の夢は変わらない。終わることなく繰り返される。しかし、同時にそれまで知り得なかったことが分かるようになっていた。

知識と時間だけは必要以上に用意されていたのだ。

知徳には分かっていた。

神奈を解放するには、方術では叶わぬことが。

知徳は分かってしまった。

神奈を解放するには、人の想いが必要であることが。

何故なら、神奈の呪いは、これまで翼人が殺めてきた人々の怨念であったから。

高野山の僧たちが神奈に向けていたのは、悪鬼調伏の呪詛。それ自体に大した効力はなく、それだけならば知徳たちにも解くのは可能だった。

しかし、それは翼人につきまとう怨念を増幅させ、神奈の魂を引き裂いてしまった。このため悲しい記憶とともに、神奈は囚われ続けることになった。

それが知徳に知り得たこと。

だが、それを生かすことだけは、許されていなかった。

悲しかった。

何も出来なくなった己の未熟さが。

だから、知徳はひたすら願っていた。

空からものごとを見つめ、憂い、期待しながら。

『空の記憶（ゆめ）』

神奈を放つてくれる者が現れるのを。

それから、知徳は永い時を、見つめていた。

裏葉と幼子が無事に逃げ延びたこと。

裏葉が幼子に方術を伝える様。

裏葉が幼子に柳也と神奈のことを伝える様。

裏葉が安らかに眠りについた様。

いつしか、幼子が大きくなり、子を成して、その子にまた方術を伝える様。

そして、神奈の魂を継いだ者が生まれ出でる様。

神奈の魂を継いだ者と、裏葉の…多くの僧の願いを継いだ者と出会う様。

そして、悲しい別れをする様。

何もかも繰り返されていく様を、ただじつと知徳は見つめていた。

永い時を。

その永い時の末。

裏葉の魂を継ぐ者——晴子が現れた。

裏葉の力を継ぐ者——往人が現れた。

神奈の魂を継ぐ者——観鈴が現れた。

人々の想いを伝えるもの——人形があった。

力を継ぐ者は、神奈の魂を継ぐ者に、己の力を…それまでの人々の想いのすべてを与えた。

裏葉の魂を継ぐ者は、神奈の魂を継ぐ者を支え続けた。

神奈の魂を継ぐ者が自身に降りかかる呪詛に打ち勝った時、それまで延々と積もっていた人々の想いは、空に届けられた。

そして、人々の怨念は、人々の想いによって打ち消され、神奈も囚われの身ではなくなつた。

しかし、まだ神奈は帰ることが出来なかつた。

神奈の魂を継ぐ者の、最後の記憶が、それを阻んでいたのだ。

だから、知徳は解き放たれたと同時に、神奈の願いを……すべての翼人の願いを叶えるために、それだけの力と仮初めの肉体を与えられた。

最後の記憶はどうか幸せなものを——それがすべての翼人の願い。

「そないなことがあつたんか……」

居候……いや、知徳の長い話が終わって、さらに一息置いてから、晴子がゆっくりとため息混じりに言った。

千年前の話に興味があるわけではないが、目の前にいる男がその知徳法師であると言われても、そうそう信じられる類の話ではないと思う。それでも、これがまったくの作り話だとも思っていないかつた。

「あなたは信じられるのか」

「信じるも何も、これだけうまい話をされれば、それが作り話でも大したもんやで、ほんまに」

言い方そのものは軽いものだったが、晴子は別に冗談で言ってるつもりも、茶化してる

つもりもない。いきなり突拍子もない話をされた割には、どこかで納得している自分気がついたらからだ。

「あなたらしい答えであるな」

「それで、あんたは何をするつもりなんや？」

「そのことであなたに一つだけ問うが、いいか」

「何や？」

「あなたの命を賭してなお、娘を戻したいと思うか」

わずかに間を置いて、心持ち険しさを増して知徳がそう訊ねると、晴子は悩む様子も見せずに即答した。

「当たり前や。こんなうちの命でええなら、いくらでも捨てたるわ」

自分みたいなどうしようもないやつ命でそんなことが叶うのであれば、どうせ死のうと思つてたのだから、そんな問いに対していまさら悩むはずがないと言える。

だが、即答した晴子に、なおも知徳は問いを繰り返した。

「死した娘の替わりにあなたの命を差し出せと言われたら」

「せやから、いくらでも出したるって言うてるやないか」

「それで後悔せぬか」

「後悔なんかするかい」

「真にそれを望まれるか」

「それが母親っちゅうもんやで」

同じような問いを何度か続けても、晴子の答えに変化はなかった。何故そんなにしつこ

く同じようなことを繰り返すのかと、晴子はさすがに苛立ちを感じていたが、知徳はふつと悲しげな表情を見せる。

「それは母親であるがゆえの闇であることに…気付かれぬか」

それに対して、晴子は反射的に声を上げていた。

「そない当たり前のことを、どうして闇なんて言われなあかんのや。あの子のためやったら、うちは何でもしたる。この命を出せ言うなら、出したる」

何故自分の命と引き替えにすることがいけなのか。そんなこと親なら誰でもそう思うに決まってる、と。

「さようか…」

知徳はいまだに暗い表情のままだったが、それよりも晴子はふと先ほどからの問いの意味が気になった。

「って、そもそもそないなこと出来るんか？ あの子が戻るなんて…」

観鈴が戻る——そんな夢やおとぎ話みたいなことをすべて信じているわけではないが、それでも晴子自身が否定出来なかつたし、知徳に否定されることを期待してはいなかつた。

「そのために我は遣わされた」

短く告げられた知徳の返事の意味するところは、それが夢でもおとぎ話でも仮定の話でもない、と言うことを強く物語っている。だが、それでも晴子はそれをたやすく受け入れられなかつた。

「はっ、都合よすぎやで、ほんまに」

「先ほどの話も、これから話すことも、すべて真実まことのこと」



『空の記憶（ゆめ）』

「あんた…いかれとるんや。それに…」

「この話を信じたいと思ってるご自身もか」

知徳は晴子が言わずにいた言葉を的確に指摘していた。

そう。そんな夢みたいな話でも、晴子は信じたいと思っていた。うそでも何でもいい。

観鈴が戻れるのなら、それこそ本当に何でもするつもりでいた。

だが、そう思うのと同時に、自分への冷たい指摘をする自分の姿がつきまとうのだ。

何故そんな夢みたいなことを信じようとしているのか、と。

そんなことに期待しても、所詮は夢は叶わずに、事実を知ってなおも落ち込むだけだ、と。

「なっ…、そ、そないなこと……」

「あなたが望むなら、それは叶えられるのだ」

「…うそや」

短く否定の言葉を漏らす晴子。だが、それは否定自体を、否定して欲しいと言う思いの現れではない。そして、知徳はその思いの通りにしてくれる。

「うそではない」

「そんな都合のいいこと……」

ゆっくりと晴子の中で、何かが動きつつあった。

それは、ゆっくりとはあるが確実に、そんなことはあり得ないと言う自分の中の大きな氷塊を解かしていく。

「もちろん、それには多少の苦難を要するが、これはあなたでなければ叶わぬことなの

『空の記憶（ゆめ）』

だ

「あるわけ……ないんや」

言葉を重ねるごとに、さらに氷塊が解けていくのが、自分でも分かる。

「何故自分を信じられぬのか」

「うちじゃ……あかんねん……」

「それは違う」

一つずつ自分の言葉を否定されるごとに、確実に自分の中にある冷たい氷塊も解ける。

「だいたい何でうちでなきゃあかんの？」

晴子が口にしたのは、実に素朴な疑問であり、それが晴子の中の氷塊のもっとも固い部分であったろう。だから、これに対する答えに納得してしまえば、それで氷塊などあつと言う間になくなってしまはずだ。

「それはあなたが強い魂の持ち主であるゆえ。いや、正確には強い魂を受け継ぐ女性であればこそ」

「何や、それ……」

「いまのあなたには遠い過去の名など意味はなからうが、あなたは本当に強い方なのだ……裏葉殿」

その名前を呼ばれてなお、晴子には特に思い当たる節はなかった。しかし、何故か心が震えているような感じに襲われた。

生まれ変わりとか運命とか、そんな大げさな話を持ち出す気はないし、これまでの自分にとって、そんなことは気になるような話題でもない。それなのに、いまこうして目の前

にいる男とは、確かにどこかで会っていた気がするのだ。それが知徳の言うところの裏葉殿かも知れないと思う。だが、いまここにいるのは千年前の女性ではなくて、現代に生きる神尾晴子である。

「……うちは神尾晴子や」

「そうであるな、確かに。晴子殿、どうされるか」

改めて知徳に問われた時、不意に晴子の中で残っていた氷塊が消えた。裏葉ではなくて、晴子と呼ばれたことよって。

必要なのは千年前の女性ではなく、いまを生きる神尾晴子つまり自分であるのだと、晴子が自分を認めることが出来たのだ。

「……ほんまにうちに出来るんか？」

またも晴子は問いを繰り返すが、それは一つの段階を踏むだけの通過儀礼のようなもので、すでに本心は固まっていた。

「あなた以外には叶わぬこと」

「……こないな駄目なうちでも構へんの？」

「あなた駄目な人ではない。晴子殿だ」

「……何や、それ……やっぱり、あんたは変なヤツや……」

笑いながら、晴子は先ほど固めた本心をゆっくりと言葉に出していく。

「うちなんか……そない立派な力持ってるわけあらへんのかな……。せやけど……あんたの話聞いてたら……何か妙な気になってきたわ」

晴子の言葉が一旦切れても、知徳は何も言わずに、続く言葉を待っているだけ。すべて

『空の記憶（ゆめ）』

を理解しているかのように。

「もし、うちに出来るんやったら…、それがうちにしか出来ん言うなら…」

言葉が途切れ、しばしの間があいた。

知徳も晴子も何も言わずにいたが、それを秋の虫たちの奏でる間奏曲が埋めていく。

しばらくして、晴子のはっきりと告げる。

「やるわ、うち」

その言葉にも、それを告げた表情にも、もう迷いはない。人が聞いたら笑うかも知れない夢みたいな話を信じ、まっとうする。晴子にはただそれだけしかなかった。

「さようか」

「何や、エライあっさりとしてるんやな。せっかく人がやる言うてるのに」

「すまぬ」

「何も謝ることはあらへんって」

そう言って晴子は笑う。一点の曇りなどない本当の笑顔で。

四、願ひ

「晴子殿、準備はよろしいか」

暗い神社の境内に、知徳の声。

「ええで。せやけど、ほんまにこれだけでええの？」

わずかに軽さを伴う晴子の返事。

「いまの我には護摩も古き文言もいらぬものゆえ」

「ま、あんたがそれでええなら、うちは何も言わんわ」

やるとはつきり決めた後、知徳はすぐのその場で行うと言ひ出した。かなり急な話でさすがに晴子も驚いたが、知徳がそう言うからにはそれで大丈夫なのだろうとすぐに納得した。

想いを伝える物——往人の持っていた人形と、晴子が観鈴と一緒に取った恐竜のぬいぐるみと、晴子の想ひ。この三つが願ひを叶えるために必要な物で、それ以外は何もいらない、と知徳は説明してくれた。

そして、人形やぬいぐるみを用意して（と言つても知徳の横に並べてあるだけだが）いまに至る。

あれだけ大層な話を聞かされただけに、もっと大げさな準備があるかと思つていたので、極めて簡単に準備が整つてしまった。晴子にしてみれば少々味気ない感じがするくらいだ。

『空の記憶（ゆめ）』

が、あまり緊張感のない晴子に向けて、知徳は険しい表情で告げる。

「晴子殿、あなたは悲しみを断ち切らねばならぬ。悲しみを残しては、新たな悲しみを生むだけゆえ。それが果たせぬ場合、願いは叶わずに、何も変わることはない」

「責任重大ってことやな」

「さらに二度はない。それでも構わぬか」

「…やり直しがきかへんから言うて、ここで逃げたらあかんやろ」

「さようか。されど、一つだけ申しておこう」

「何や？」

「ご自身の命を賭してなお、娘を戻したいと言う想いは本当であるか」

「当たり前や」

「そうか……」

それは前にも何度も繰り返された問いだったし、その都度晴子の返答も変わらないものだった。

それを繰り返し繰り返し訊ねる知徳の真意は凶りかねるが、それを訊ねる時の知徳の表情が大体暗い物であることが、晴子の心に引っかかっていた。

「それでは、もう何も申すことはない」

「始めるんか？」

「晴子殿がよければ」

「うちはいつでも構わんで」

「相分かった」

『空の記憶（ゆめ）』

その言葉と同時に、知徳は両手をそれぞれかたわらに置いた人形とぬいぐるみの上にかざした。

人形にあるのは往人たちが継いでいった、たくさんの人々の想い。ぬいぐるみにあるのは、観鈴と晴子の幸せな記憶と願い。

それらのすべてが知徳へと伝い、流れていく。

晴子はいま一つ緊張感に欠けていたが、知徳のそれぞれの手の下から光が出てくるのを見て、急に心臓が高鳴り始めた。そして、これは見せ物ではなく夢でもなく紛れもない本当のことで、これから自分はずっと想ってきた願いを叶えるのだと、改めて強く認識していた。

晴子の願いは、観鈴を戻すこと——ただそれだけだった。

やがて、知徳の手にあった光は強さを増していき、その光は知徳の姿も暗くなっていた。神社の様子も何もかも溶かしていってしまう。

そして

晴子は何もかも真っ白な光の中へと、吸い込まれていった。

光の中。

何かが見えてきた。

何もかも白い景色の中に、ぼんやりと映画を見るように浮かび上がる光景。

それは、晴子の姿。

「お母さん？」

観鈴は浮かび上がった晴子に向かって、そっと声を掛けてみた。

しかし、それはまさに映画のように、観鈴からはただ見えるだけらしく、声が届いてるような気配はない。

「お母さんっ！」

今度ももっと大きな声で呼んでみた。

だが、やはり反応はない。

「わたし、ここだよっ、ここにいるんだよ！」

大きな声を続けてみても、その場に見える晴子の姿に変化はない。それでも観鈴は呼ぶのをやめようとは思わなかった。

何故晴子の姿が見えたのか、何故自分の声が届かないのか、そんなことを悩む余裕などなく、ただ叫び続けていた。

「お母さん！」

が、不意に、晴子の姿に変化が現れた。

突如として晴子の泣き崩れている姿になったのだ。

「え……」

自分の声が届いたのか。一瞬だけ観鈴はそう思ったが、そうではないことをすぐに悟る。晴子の周りの情景がはつきりと見えてきたのだ。しかし、それを見て観鈴は思わず言葉を詰まらせてしまう。

「そ、そんな……」

観鈴の前に繰り広げられたのは、観鈴の葬儀の際に泣き崩れている晴子の姿。何故そん



な光景が…と思う前に、観鈴は改めて晴子の悲しみの深さを思い知らされた。

「が、がお…」

いつもの口癖がなくても、誰も観鈴の頭を叩きはしない。

「わたし…そんなつもりじゃあなかったのに…」

と、そこに声が重なる。

「観鈴の魂はもう尽きるけど、代わりの魂があれば戻れる」

それは翼を持った、もう一人の観鈴<sup>じぶん</sup>。

「あ……」

「戻りたいでしょ？」

「う…いやだよ……」

小さく首を横に振る観鈴に向かって、翼の少女はそんな観鈴に構うことなく言葉が続けた。

「あの人が身代わりになれば、観鈴は戻れるのに」

「それだったら、戻れなくていい…」

いくら戻れると言っても、晴子を身代わりにするのなら、戻る意味がない。

だが、翼の少女の言葉が止まることはない。

「観鈴を失ってから、あの人はずっと悲しんでいる」

「お母さん……」

「観鈴が最後にうそをついたから、自分を責め続けている」

「やめてよお……」

最後にうそをついたこと。それは観鈴にとって、いくら後悔してもやまないことだった。確かにそれは晴子を想ってのうそだった。それでも、残された人のことを考えてみれば、それでよかったのかと。

「戻れるよ」

「いやっ、戻りたくないっ！ お母さんがわたしの代わりに死んじゃうなら、わたし戻れなくていい」

「あの人はそれを望んでいる」

「やめてよ」

「観鈴が戻るのなら、自分の命などいらないと願っている」

もう一度観鈴は、ずっと映し出されている泣き叫ぶ晴子の姿を見た。やはり声は聞こえないものの、その口は翼の少女が言ったようなことを紡ぎだしているようにも見える。

だが、そんなことは観鈴が望んでいることではないはずだった。

「それがあの人の望むもの」

「でも、わたしはいや！ お母さんはお母さんで生きて欲しいもの」

「観鈴は戻りたいんでしょ」

「いやだよ……」

「じゃあ、ずっと悲しいままにさせておく？　ずっと泣き続けるままにさせておく？」

その声に、観鈴はもう一度晴子の姿に目をやった。先ほどからずっと繰り返し広げられている、泣いている晴子に。

しかし、観鈴には晴子の声は届かない。

「お母さん…」

そして、たまらずに観鈴がそっともらした小さなつぶやきも、晴子には届いていなかった。その代わりに、翼の少女が観鈴に問い掛ける。

「戻りたいのに、またうそをつくの？」

「うそ…じゃない……」

自分の代わりに晴子が死ぬなら、戻りたくない。それは決してうそではなかった。ただ、それが本当の願いでもなかった。

「うそをついて悲しい思いをする限り、ずっと一人」

ずっと一人…と翼の少女が言うのは観鈴のことなのか、晴子のことなのか分からなかった。だが、それまでずっと否定していたことを、観鈴はもう保つことが出来なかった。

一人で遊んでいた日々や、学校で楽しそうに会話しているクラスメイトたちを羨望の眼差しで見っていた日々…。

夏になって、往人と出会い、晴子と一緒に頑張った日々…。

それらがわずかの間に走馬燈のように、観鈴の中に浮かんできた。そして、観鈴はそつとつぶやいた。強がりでも意地でもない、本心からの言葉を。

「わたし…一人でいたくない」

「じゃあどうしたいの？」

そう訊ねる翼の少女の口調が優しいものになっていった。まるで、晴子を思わせるように。それもあって、観鈴はもはや本心を偽るのをやめた。

「わたし、お母さんと離れたくない」

さつきよりもはつきりとした口調で言った。

何故か言えば言うだけ、晴子が近づいてきているような感じがする。自分の心が軽く  
なっていくような感じがする。

もつとだ。

もつと強く言わないといけない。

観鈴は本当に心からそう思っていた。

「ずっと一緒にいたいよっ！」

観鈴がより一層強く叫んだ時。

少女の背中の翼が大きく広がりながら、観鈴を包み込んでいった。まるで、晴子が観鈴  
を抱き締めているように。

気がつくとき晴子の周りは真っ白になっていた。

「何や、ここは…」

と、突然に目の前に光景が広がった。

「なっ…」

それは前に夢で見たのと同じ夏祭りでの光景——泣いている観鈴と、それをなだめて一  
緒に帰る自分。

「…っ、いまさらこれくらいで…」

泣き叫ぶ小さな観鈴の前に、それでも晴子はこらえることが出来た。少なくともいまは  
泣いている場合でない、と自分を奮い立たせることで。

『空の記憶（ゆめ）』

しかし、目の前に広がる光景はそれで終わりではなかった。

いきなり場面が変わり、観鈴が一人でいる様子が見える。それがどこなのかはよく分からないが、観鈴はひどく不安げな表情をしている。

『帰りたいよ……』

周りをきよろきよろと見回しながら、観鈴がつぶやきを漏らす。だが、やはりそこには観鈴以外に誰もいないらしい。

『どうして、こんなところに一人でいなきやいけないかなあ』

涙目になりながら、なおも誰かを探すようにしている観鈴の姿。どうやら観鈴には自分の姿は見えてないらしいと晴子が納得していると、ふと観鈴が涙目になりながら、つぶやいた。

『お母さんのところ…一番大切な人のいる場所に…帰りたいよ…』

そして、観鈴はそれから涙をポロポロとこぼしながら、ずっと誰かを探しながらどこか分からない場所をさまよっている、そんな光景が映し出された。

『どないすればいいんや！』

晴子が叫ぶ。だが、それは観鈴には届いてないらしく、観鈴は相変わらず泣き続けているだけだった。

『あの子、助けるにはどうすればっ…』

言葉を詰まらせながら、晴子はきゅっと唇を噛んだ。そのままでは自分も泣きそうだから。その間にも観鈴の寂しい声が晴子の耳を浸食する。

『寒いよお』

『空の記憶（ゆめ）』

『お母さん…』

このままではいけない。

晴子は直感的にそう思った。

「そや、うちが代わりになるんや。そうすればええんや」

寂しそうにする観鈴を、悲しそうにしている観鈴を前に、自分のすることはこれなのだと晴子は改めて思いながら、自分の拳をぎゅっと握った。

とにかくいまは観鈴のそばに行くのが先決だと思った。

「って、どこ行けばいいんや！」

苛立ちをあらわにしながら周りを見回してみても、何をどうすればいいのかさっぱり分からない。そもそも、ここがどこなのかもよく分かってないのだ。

「あかん…このままじゃ、あかんねん」

こうしている間にも観鈴は泣き続けている。

このまま何もせずに、見てるだけではこれまでと何も変わりがなく、ここにこうしている意味もないように思えてくる。

「せやけど、どないすればええんや…ほんま」

いても立ってもいられずに、晴子が半ば怒りながら叫ぶと、それに対してどこからか返事が来た。

「晴子殿、それは闇であることに気付かれよ」

それは知徳の声。

しかし、それに耳を貸すような余裕は晴子にはなくなっていた。むしろ、邪魔をされた

とばかりに激しく言い返すだけだ。

「何言うてんねん！ あの子が悲しんでるやないか、泣いてるやないか！ 闇もへったくれもないわっ」

「晴子殿」

「やかましっ！ うちはどないなつても構へん、あの子の代わりになるんや」

なおも論すような知徳の言葉に対して、晴子は激しく首を振りながら精一杯の否定を示した。それが知徳の言葉であっても、素直に聞けるような余裕は素手になくなっていたのだ。

「せやから、あの子…助けてくれへんか」

もう誰でもいいから、どうにかして欲しい。そんな思いで晴子はその場で座り込むように嘆願する。

「ほんま頼むわ…」

そして、その涙混じりの声に、不意に反応があった。

「それは違うんじゃないのか」

「誰やっ！」

晴子が慌てて、声のした方を睨むようにすると、そこには往人の姿があった。

「…何や、前の居候かい」

突如として往人が現れたのに、晴子は特別に不思議そうにすることもなく、やや冷たい口調で返した。しかし、往人もそれに動じる様子もない。

「どうして代わりになる必要があるんだよ、あんたが」

『空の記憶（ゆめ）』

「それは母親として当たり前のことや！ あんたにはうちの気持ちなんて分からんやろうけどな」

「ああ、分からないな。そんな身勝手な母親の気持ちなんてな」

「身勝手やて？」

訊き返すと同時に晴子の表情が強ばった。だが、往人はそれさえも気にする様子もなく、うなずいてみせる。

「そうだ」

「あんたみたいな赤の他人に、うちらのこと分かるわけないやろ」

険しい表情で往人の言葉をさえぎるように、晴子がぴしゃりと告げる。すると、往人は苦い表情でそれに返した。

「どうしてあんたは一番肝心なことに気付かないんだ？」

「そないなこと、あんたに言われるまでもないわ」

しつこく繰り返す往人に対して、晴子は苛立ちを感じていた。まして、こんな簡単なことを訊いてくるようでは、まともに答える必要はない。そう思つて、今度は突き放すような言葉だけでなく、腕組みをして顔を横を向けた。

「じゃあ何で、自分が死んでもいいなんて言えるんだ？」

「あんたには分からんことや」

「あいつが何を望んでいるか、なんてことを考えればすぐに分かるはずだぞ」

一向にお構いなしな往人の言葉になど、晴子はこれ以上耳を貸すつもりはなかった。しかし、いまの言葉だけは聞き流せず聞いた。



「何を望むて…」

観鈴は「帰りたい」と泣いている。それが晴子の見た観鈴の姿だった。

だから、晴子はそれを叶えたいと願っていた。しかし、それでは何かが足りないような気がしてきた。

先だってから再三に渡り知徳が口にしていた「母親ゆえの闇」の意味するものと、いまさっきまで自分が抱いていた願い。

何かが違う。

そんな思いが急激に晴子の中で大きくなっていった。

「あんたは一人であるのが辛かったんだろ？　じゃあ、何でまたあいつを一人にさせるんだよ？」

一人になると言うのがどんなものであるのか、イヤと言うほど思い知らされたのに、

「観鈴をまた一人にさせるのか」と訊かれたら、晴子はすぐに言葉を返すことが出来なかった。

観鈴を失ってから、自分は一人で何も出来ずにいた。

泣きながら過ごすだけの、むなし日々。それが、変な男と出会うことで、少しずつ変わりは始めていた。

だから、分かっていた。

一人では何も出来ないことが。

一人では抜け出せないことが。

なのに、今度は観鈴を一人にしようとしていると言うのだ。

「一人？…」

それは往人に向けたものではない、ただのつぶやきだった。と、同時に晴子の視界から往人の姿は消えていた。だが、どこからか声だけが響く。

「あんたなら、分かるだろう？ あいつの本当の声が聞こえるだろう？」

往人の声に小さくうなずきながら、晴子は何も言葉を返さない。

一人はイヤだった。

だから、自分は死のうとも考えた。

でも、観鈴を戻すことが出来ると知徳が言った。

だから、自分の命を代わりにしても、観鈴を戻そうと思っていた。

(…それって、おかしいんか…)

自分で自分の気持ちと行動に、ふと疑問を感じる。さっき感じた足りない何か、とても大事なことのように思えて。

ふと、どこからか声が聞こえてきた。

それは間違いなく観鈴の声。

『わたし…一人でいたくない』

「せやから、お母さんがっ…」

思わず声を上げた晴子だったが、そこで気がついた。さっきから感じていた疑問のわけに。

一人でいたくないのは、自分だけではない。

だから、自分がここで「観鈴の代わり」になったところで観鈴が一人になってしまうの

『空の記憶（ゆめ）』

は、いままでと同じである。

『わたし、お母さんと離れたくない』

観鈴の声が一層強くなったような気がした。  
もう少し。

何が、と具体的に言い表せないが、確かに晴子は自分の中での変化を感じていた。  
そう。

観鈴が望んでいること。そして、自分が望んでいることは、最初から一つだけしかなかったのだ。

観鈴の代わりに自分が命を捨てることでも、観鈴だけが消えてしまうことでもなく、互いが一人であることでもない。

それは、「一緒にいたい」……ただそれだけだった。

晴子がそれをはっきりと願った瞬間。

「ずっと一緒にいたいよっ！」

観鈴の声がすぐ間近になり、それと同時に晴子の目の前に、観鈴の姿が現れた。それまでと違って、何かの映像を見るような曖昧さはなどなく、本当に目の前に存在して。

「観鈴っ！」

晴子は目の前に現れた観鈴の存在を確認するかのようになり、両手を広げて観鈴の体を包み込んだ。自分の大事な娘の名前を叫びながら。

「お母さん？ お母さんだよね？」

観鈴が帰りたいとずっと願っていた場所。それは晴子の腕の中。

『空の記憶（ゆめ）』

晴子がずっと願っていたこと。それは観鈴をこの手で抱き締めて、その涙を自分の胸で拭うこと。

「観鈴っ！ あんたの声、ちゃんんと聞こえたで！」

心地よい柔らかさと温もりを感じながら、晴子が観鈴の存在をさらに確かめるかのよう  
にぎゅっと力を込めると、

「お母さん！」

観鈴も負けずに晴子の温もりを確かめるように、顔を寄せた。

「うちもあんたと一緒にいたいんや！ もう一度二人で頑張るな」

「うんっ！ もう一度お母さんと一緒に頑張る！」

もう、一人で泣くことはない。

もう、一人で泣かせたりはしない。

泣く時も、

笑う時も、

あるいは怒る時も、

何もかも二人。

その想いだけが、二人のすべてだった。

そして、どこからか声が二人のもとに届く。

聞き覚えのある懐かしい感じのする声。

一人なのかも知れないし、たくさんの人の声であるようにも思える、とても不思議な、とても暖かい声だった。

『空の記憶（ゆめ）』

『空に囚われていた最後の一人は、放たれました。でも悲しい記憶を持ったままでした。』

だから、願ったのです。

最後の一人には幸せな記憶を。

悲しみではなく、喜びを。

絶望ではなく、希望を。

その願いは、あなたたち二人に託されました。

これで

空に帰ることが出来ます。

ありがとう』

## 終、記憶の翼

翼を持ったものがある。

それは、この星の大気に生まれた。

記憶を受け継ぐことで、果てしない時を旅するものたち。

だが、その記憶も永遠ではない。

この星にあるすべてのものが定命であるように、彼らもまた定命の運命を持って生まれた。

彼らはいつしか星の大気に帰る。

すべての知識と、

すべての記憶——すべての喜びとすべての悲しみ——を持って。

そして、いま。

最後の一人がこの星の大気に帰る。

悲しみの輪廻ではなく、それを断ち切ることの出来た多くの人々の想いによって叶えられた、幸せな記憶を抱いて。

八月十四日。

観鈴がそつと目を開けると、先ほどから感じていた光と温もりの正体がすぐに分かった。と同時に、いま自分がどこにいるのかも。

『空の記憶（ゆめ）』

「お母さん…眠っちゃってるね」

かたわらにいたのは、枕元に寄り添うようにして眠っている晴子。

安心したように観鈴がそのまま見つめていると、晴子のまぶたが動きを見せ始め、やがてゆっくりと目を開いた。

「…ん…朝か…」

まだ少し寝ぼけ気味の晴子に、観鈴がそっと声を掛ける。

「お母さん」

「うん…あれ？ 観鈴やないか…何で…」

観鈴の声で晴子が徐々に意識を明らかにしていくものの、唐突に不思議そうな表情を見せた。

「どうかしたの、お母さん？」

観鈴が訊ねると、晴子はわずかに合点がいかないように首を横に捻る。

「あ、ああ…何やよう分からへんに、えらい長い夢を見てたような気がするんや」

「夢？ わたしもだよ。ずっと一人で悲しい思いをしてたけど、最後にお母さんが出てきてくれた…とても幸せな夢」

「うちも似たような夢を見てたんよ。あんたがいなくなってもうて、一人で悲しんどる夢。せやけど、最後はあんたと一緒にもう一度頑張る言うてな…」

「にはは。夢でもお揃い、嬉しいな」

「せやけど…それは夢やな」

観鈴に向かってそう言いながら、晴子は自分にも言い聞かせていた。

長い悲しい夢が、最後に幸せなものになっていた。観鈴も同じようなことを言っているが、それがどんな意味を持つのかなんていくら考えても分からないし、何故か「そんなことはもう気にしなくていい」と言う結論にあっさりと落ち着いてしまう。

「お母さん？」

「何や？」

「海行きたいな、わたし」

「…って、あんた体はもういいんか？」

昨日まではまだ足元がおぼつかない状態だったはずだと晴子が訊き返すと、観鈴は笑顔で答えながら、足もバタバタと動かしてみせた。

「うん、足もちゃんと動くから、車椅子もいらなと思う」

「ほんまか？」

晴子はじつと真顔で観鈴を見つめて問いたです。何故かは分からないが、ここでしっかりと確認しておく必要があるような気がしてならないのだ。

「うん」

「ほんまにもうどこも痛くないんやな？」

「うん、ホントだよ」

「よっしゃ！ そんじゃ、行こかー！」

「あ…」

「何や？」

「お腹すいたな…」



『空の記憶（ゆめ）』

「ははは、そやったな。まだ朝ご飯食べてへんしな。ほな、朝ご飯を食べたら二人で海行こな」

「うんっ」

観鈴は笑顔で元気に答え、その笑顔を見て晴子も笑顔で返す。

どこにでもありそうで、ここにしかない平和な日常が、確かにあった。

八月も半分を過ぎたとは言え、日差しの強さも蝉たちの声もまだまだ衰える気配はない。

しかし、それらに負けることなく、二人の笑い声は空にまで届いていた。

青く澄んだ、夏の空に。

さまざまな人の想いと願いを込めて。

（了）

『空の記憶』あとがき

どれほど努力したとしても、誰かを悲しませるような死に方は、死んだ人も残された人も不幸でしかないと私は思います。だから、この作品を書きました。

晴子さんの笑顔を見たい、ただそれだけのために。

だから、この作品は力業による強引な展開をしています。このようなエンディングがあつて欲しかった…と言う自分の想いだけで構想を生み、想いだけで書いていますので、限りなく自己満足の産物であることは間違いないです。自己陶醉の極みと言つてしまえば、そうかも知れないです。

ですが、これを書いている途中、晴子さんについての解釈が自分の中で百八十度変化するような意見に触れました。

それはこの作品の根本的な部分を完全に破壊し、收拾をどのようにつけようかと悩ませる結果になりました。もし、この作品の構想を練る以前にその意見に触れていたら、絶対にこの話は書かないと思いました。

その意見に関して詳しくは書きませんし、誰が言ったものなのかも伏せておきますが、自分としては、その意見に大いに納得してしまったのは本当のところです。

ですので、こうして書き上がった現在、自分としてはこの作品の位置づけがよく分からなくなっています。ただ、それでもこの作品を思い立った経緯は真剣な想いであったのも…本当です。

『空の記憶（ゆめ）』

追加コメント（2000/10/31）

一部見直しと誤記の訂正などをやりました。ラストの部分に書き足しをしようかとも思ったのですが、やはり蛇足になるような気がしたので、現状のままにしておきます。

色々思うことはありますが、それでも私はやっぱり晴子さんと観鈴を嫌いになつたりはしていないみたいです。

二〇〇〇年十月三十一日 記

2000/10/23 初版 a s h

2000/10/31 一部修正 a s h

2016/05/04 PDF書式変更 a s h